
HOLSTER 空薬莢

nakaya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HOLSTER

空薬莢

【Nコード】

N9081X

【作者名】

nakaya

【あらすじ】

二十一世紀。海面上昇により首都を失った日本国家は解体され、米国、中国、ロシアに分割統治をされていた。そんな時代。難民として存在を切り捨てられた者たちの中で生まれたジムは、市民権を手に入れるため、FBIの犬となって、同じ難民の中から生まれたテロリストを相手に暗闘していた。

BULLET: 1

新世紀に入ると共に、その国の飢えは加速した。

飽食に慣れきった人々に、我慢、許容などの言葉を耐える強さは無く、等しく貧困が覆い被さると、あっさりと人道主義は放棄された。

東京という名の街が海に沈んで二十年ほどになる。

大きく内陸へと広がった東京湾の一角。

ドブのような裏路地に、一人の少年が生きていた。

「どうした？」

話しかけて来た立派な男に一瞥をくれたものの、少年は、再び目前にある豪邸へと目を戻した。

柵の向こう、緑の芝生の上で、女の子が大きな犬と戯れていた。

「ああいう子が好きなのか？」

女の子の顔が上がった、少年と男に気が付き、少女は家の中へと逃げ込んでいった。

少年の顔が苦渋に歪む、だがすぐに嘲りに変わった。自嘲であった。

娼婦の子として生まれおちた身だった。

保険も無ければ出生届けすら出されていない。

彼は、市民としては数えられる事のない人間であった。

もつともその事に憤りは感じていない。せいぜいが裕福な者を妬む程度で、彼は決して、誰かを憎んだりしてはいなかった。

恨むよりも、盗みを働く方が先であったからだ。

少年は、それでも希望と憧れを持っていた。

この世には、綺麗なものがあるのだと。

自分とは違う、真逆のものがあるのだと。

それは決して、手には入らないし、交わらないし、染まることもできないものだけだ……。

男を振り仰ぐ。

少し腹の出たその男は、禿頭の黒人であった。

「仕事って、なに？」

たどたどしい日本語で、少年は尋ねた。

言葉に不自由なのは、余り人と話す機会が無かったためだろう。

「……いろいろだ」

と男は口にした。

「訓練と教育、仕事はそれからになる……。そうだな、十年もすれば市民権をやるう」

「十年……」

「耐えられるか？」

少年はもう一度豪邸に目をやった。

ギョツと歯を食いしばり、そして何を心に誓ったのか、シャツの胸元を強く握り、引っ張った。

「……やる」

「そうか」

男は目を細めた。

不憫だとも思ったのかも知れない。

首都機能の麻痺した日本は、政府は、国を外国へと売りつけた。

その際に、諸処の事情から市民としての登録を受けられず、あるいは受けることを拒否した人々は、行政府の庇護を受けられないまま、現在も悲惨な日常を送らされていた。

報道では、元は犯罪者であったり、不法入国者が大半を占めていと誘導されていた。だが、単純に心身の都合や事情で期間内に登録をできなかった者たちもいたのだ。

少年の母親は、後者であった。そして身売る以外に道を無くし、そして亡くなった。

当たり前の死に方をした一人となったのである。

そして十年。

少年は青年になっていた。

だが今だドブの中に浸かっていた。

「ジム」

彼、ジムは、唯一の上司であるあの男から、シガレットケースを受け取った。

やたらと大きな橋の上だった。欄干にもたれ、風は寒い。

夜の深まりと共に冷え込みもまた増していた、二人は申し合わせたように襟を立てた。

男は茶系、ジムは黒のコートであった。

「今夜だ。取り引きの内容は、薬が五百キロ。ま、そんなものは警察がどうにかする」

黒い顔をジッポの炎が照らし出す。

元は東京湾を横断する橋であったが、今では海面の上昇に伴って中央部分で水没していた。

陸地側のこの部分は、栈橋のように海の上に浮いている。

けたたましく行き交うバイクとギャラリー達は、この先で行われているチキンレースの観戦者である。

「……で、仕事は？」

切り出すジム、細身で、頬もやたらと痩けていた。

目つきが悪く見えるのはそのせいだろう。

黒髪はべたつき、前髪は顔を隠していた。

「細かいことはケースの中だ」

男はシガレットケースを目で差した。

「やつらは高木首相の長女、真美の誘拐を計画している」

シガレットケースには中折りにされた紙がタバコの下に敷かれていた。

「……首相官邸は街を挟んだ反対側だよな？ 随分と手の込んだ図だな」

紙は首相官邸の見取り図である。

「それだけ今回の誘拐には大きなものがかかってるんだろうさ。で、どうする？」

「どうするもなにも……」

ジムは目を鋭く細めた。

「……俺に話を回すんだ。ただ警備をしろって言うんじゃないんだろ？」

「非法な仕事だからこそ、戸籍のない彼の元へと話が回って来るのだから。」

彼の口元に奇妙な笑みが浮かび上がる。

「……主犯は赤き陽の昇る国だ」

「そうか」

何か思う所でもあるのか、ジムは目を閉じて夜空を仰いだ。

「ジャパンが分割統治されるようになって、何年になると思ってるんだろうな……」

「九十年代に自らの犯した失策を認められん連中だからな。あがいてるのさ……」
「……と、俺達が政治の話をして仕方があるまい？」

「……それはそうなんだけど、な」

ジムは下向くと、ケースからタバコを一本取り出し咥えた。

男のジッポを借りて火を付ける。

寒さに背中を丸めた二人は、それ以上の言葉は交わさなかった。

テンミニッツ。

住宅街から少し離れて、官邸は山の中腹に建てられていた。

山一つが全て敷地となっており、山道は登り口で検問同然のチェックを受けなければ通れないようになっていた。

しかし今夜半、黒いRV車が無言のままに通り過ぎていった。

内通でもしているのだろうか？ 検問所に詰めている警備員との

疎通は、目配せだけで済まされた。

見とがめる者もない中を、車は奥へ奥へと進んでいく。

電動なのか天然ガスか、とにかくそのタービンのアイドリング音は低く抑えられていた。寝床に着いている住人の耳につくほどではないだろう。

車はそのまま、邸宅の真正面に停車した。

ファイブミニッツ。

正面玄関が開き、中から手招きする影が見て取れた。

ポチャツとした体形、透け気味の服はネグリジェだろうか？

車から黒の工作服で統一した男達が静かに降りた。

二人だ、顔は暗視ゴーグル付きのマスクで覆い隠している。

車に残ったのは一人だけであった。

人影と合わせて三人が屋敷に姿を消す、それを見計らうように、庭との垣根から誰かが車に近付いた。

ウィンドウよりも低く腰を落として、気付かれないように回り込む。そして素早くマフラーに何かを取り付けた。

それはスプレー缶であった、缶から吹き出したガスがマフラーを逆流し、車内を静かに満たして行く。

ずりずりと、車中の男が尻を滑らせ、意識を失う。

不審者を上回る不審人物は、車内をひと目確認してから、屋敷の中へと潜り込んでいった。

今回の一斉検挙は、米国第五十一州、ジャパン始まって以来の大きなものになるはずであった。

湾岸部はパトカーのランプによって、街中以上の賑わいを見せている。

野次馬の半分は、この地区に巣食うホームレスで、残りは事件を

嗅ぎつけたマスコミであつた。

一般人の姿はない。ここは放棄された無法地区なのだ。

「やっぱり変ですよ、部長もそう思いませんか？」

若手の刑事が、上司に問いかけている姿があつた。

「だがなあ……、ヘロインは本物だ」

地盤沈下によつて傾いているビルたち。だが中には真つ直ぐなままのものもあり、そういったビルは、不審者たちの住み処や、倉庫として用いられていた。

「焦るなよムツキ」

若い刑事は舌打ちを発する。

「……ヘロインが幾らあつたつて、捕まえたのが小物だけじゃあ、意味が無いですよ。そうでしょう？」

海の側に逃げられたかなと、二人は視線を投げやる。

そこには満潮のために、海面に没しているビル群があつた。

中には没しきらずに頭を晒しているものもあつたが、まるで墓標であつた。

今日は月がないために、不気味な闇に沈んでいるようだった。

「部長！」

大きな声の呼びかけに、二人はびくんと体を跳ねさせた。

「なんだ！？」

「本部からです！ 首相官邸から警報が出ていると」

理解に伴い、表情が切り替わる。

「シット！ こっちは囧かつ、ムツキ！」

ムツキはとつくに駆け出していた。

屋敷が大きければ、それなりに人の気配は感じにくくなるし、立派な建物ほど足の音も消しやすくなる。

絨毯が立派であるからだ。

深い毛と靴の底の特殊ラバーによつて足音を断ち、侵入者達は気

配を消して進んでいく。

指で合図をし、あらかじめ叩き込んであった間取りを思い出し、目標を探る。

首相は現在本国の会議に出席中、この屋敷には首相夫人と娘、二人だけのはずであった。

つまり、彼らを引き込んだのは、首相夫人である。

夫人は二人を招き入れた後、自分の部屋へと引き上げていった。事件の発覚後、対応などについての内部情報を伝えるように、指示されているからだ。

おおよそ完璧に見える計画だった。しかし既に破綻は見え始めていた。

切られているはずの警報装置は作動していた。ただし作動中を示すランプには黒いビニールテープが貼られ、状態を気付かせないように気が配られていた。

そこかしこにある赤外線センサーは、逐一状況を警察本部へと転送していた。

やがて彼ら二人は、二階にある一つの扉に辿り着いた。

三、二、一、ゴーと指で合図をし、カチャリとノブを回して、一人が入り込む。

その部屋は熊のぬいぐるみなどが飾られている、荒事には似つかわしくない世界であった。

大きめのベッドには、十五・六歳の娘がすやすやと気持ちよさそうに熟睡している。

長い黒髪を持っていた。少なくなった純血の日本人を感じさせる面立ちもしていた。少女趣味が抜け切っていないのか、大きめのピンクのパジャマに、胸にはこれまた大きな熊のぬいぐるみを抱いている。

長女、真美である。

侵入者は真美の鼻先にスプレーを吹き付けた。

「ん……」

寝苦しげに呻きを漏らす、目は覚まさない。

男は真美の体を担ぎ上げると、ドアを出て、仲間の姿を探した。だがそこに共犯者の姿は無かった。

「きゃあああああああ！」

悲鳴が聞こえた。

「あの、バカ！」

舌打ちして、男は慌て、廊下を走った。

「きゃあ、きゃああ！ きゃあああああ！」

男は焦った、何故だか仲間が気絶して転がっていたからだ。

それに錯乱している首相夫人の様子からは、彼女がやったとは思えなかった。

では、誰が？

廊下に月明かりが差し込んでくる。

彼女は闇の向こうにいるものに怯えていた。

月明かりに応じて闇が薄まり、そこに一つの人影が見えた。

闇だと思っていたそれは、暗がりには紛れていた人であった。

それは黒いコートの青年だった。黒いパンツに黒いブーツ。

コートの前がはだけられている、その下のタンクトップのシャツも黒だった。

スラリと抜き放たれるナイフは、ナックルにガードの付いた大物だった。

暗闇の中で鈍く光る。

「ちっ……」

男は真美を担いだままで腰に手を回した。

コートの青年が駆けるように間合いを詰める。首相夫人の脇を抜け、大振りのナイフを横に薙ぐ。

真美を担いでいたために、男は銃を抜くのが遅れてしまった。

ギ、キンと、硬質で耳障りな音が響く。同時にバンと大きな発

砲音も鳴った。

男は狙いを定めるのが間に合わないと思つくと、青年のナイフを銃身で受けて弾いたのだった。だがトリガーに指をかけてしまつていたために、間違えて引き金を弾き、発砲してしまつていた。

跳ね上がった銃口から放たれた弾丸は、天井に小さな穴を穿つて夫人のひきつるような悲鳴を誘う。

閃くように返されたナイフが、真美を担ぐ腕を斬り付ける。

落とされる真美、刃の軌跡に添つて宙に糸を引く鮮血。

流れるように動く青年。脂ぎつた前髪が跳ね、彼の顔をはつきりと見せた。

「ジム！？」

月明かりに見えた顔に、男は驚きの声を上げた。

取り落とした真美を諦めて跳び下がる。

目を細めてジムは身構える。知り合いなのか、知られているのか、思案しているようだった。

ジムは口を開きかけて……、結局つぐんだ。

問いただす必要性を見いだせなかったからだ。

一方で男は、腕を真つ直ぐに伸ばし、銃口をジムにも、夫人にも、どちらにも狙いを定められるように、ふらふらとさせていた。

男は撃つべきかどうか、惑つていた。だが急に点いた電灯の明かりに目が眩み、結局逃げ出す方を選んで身を翻した。

すぐ側の窓を割つて外へと転がる。

ジムはまだ離すまいとする夫人の顔に、後ろポケットに入っていたスプレーを吹き掛けた。

「あ……」

どさりと……、夫人は力を無くして倒れ伏した。

「う……」

交代するように呻きが聞こえた、真美だ。

「……だ、れ？」

落とされた拍子に肩を打ったのか、押さえている。

それでも意識はまだ朦朧としているのだろう。目の焦点が合っていない。

ジムは鼻から息を吐くと、張り詰めていた雰囲気霧散させた。無造作な動作で真美の側に膝をつく。彼は彼女の体を抱き上げて、前髪を掻き上げるように撫でつけてやった。

「う、ん……」

嬉しそうな身悶えをして、真美は体から力を抜いた。不思議と彼の瞳に安堵して。

（おやすみなさい……）

真美はとても穏やかに瞼を閉じる。

「警察だ、動くな！」

ジムは真美を抱いたまま、若い刑事……、銃を構えているムツキへと振り返った。

その目は、元の鋭いものへと戻っていた。

BULLET:1 (後書き)

大昔に書いたものをリメイクしてみています。

この頃は、都市が沈むなんて、海面上昇しかないって思っていました…。

現実には俺の想像を超えてました…。

BULLET:2

翌朝。

「釈放って、なんですか!」

ダンツと振り下ろされた拳に、机の上の書類が崩れ落ちた。

食って掛かって来るムツキに、部長であるロインは書類を拾えと目で命じた。

「……上からの指示だ。ついでに彼は、一連の犯行とは無関係だ」
「なぜそう言えるんです」

ロインは、ぷらぷらと手を振って、追い払おうとした。

「気にするな」

「しますよ!」

ビリビリと声が窓を震わせる。

それ程に苛立つ声は大きかった。

「これだけの事件で、逮捕者がゼロですよ? 奴らまた来ますよ、絶対に!」

「……一人は気絶してたらしいじゃねえか。それを捕まえ損なったのはお前だろ?」

「目の前に凶器を持った怪しい奴が居るんですよ!? 銃を下げられるわけが無いじゃないですか!」

「それで、目え覚ました誘拐犯に蹴り飛ばされたあげく、彼に庇ってもらいましたってか?」

恥辱のためか、ムツキの顔が真っ赤に染まる。

それを横目に、ロインはタバコに火を付け、くゆらせた。

「さっさと行け。お前には令嬢の護衛を命じただろうが」

「なんで誘拐犯の追跡調査じゃないんですか」

「頭を冷やせ……、それだけだ」

「くそ!」

ガン!

蹴飛ばされ、マホガニー製の机に、醜い窪みが刻まれた。

「真美！」

「美幸……」

駆け寄って来る親友に真美はげっそりとした顔をした。
ぱたぱたと小走りに駆け寄って来る。

髪は栗色のシャギー入りショートボブ。

変形セーラー服のスカートが、その勢いに大きく広がっている。
その嬉々とした表情を見て、真美は先手を打って釘を差した。

「……お願いだから、もっと詳しく教えてよ、とか言わないでよね」
「え……？」

「そんな顔してもダメ！ それにほんとに、口止めとかされてるわけじゃないんだから」

「じゃあホントに寝ちゃってたの？」
「ん……、それもはつきりしないのよねえ」

つと二人は校舎から校門までの短い距離を並んで歩いた。
並ぶと二人の背丈は変わらない、平均からも小柄な方だ。
真美は本当に困っているといった顔をして首を傾げた。

「薬で眠らされてたらしくって……」

「お母さんは？」

「ん、まあ……」

その点については、護魔化す様な受け答えしかできなかった。

浮気相手にそののかされて、実の娘の誘拐事件について、片棒を担いだ、などという話を口に行けるはずがなかった。

（誘拐と言ってもお金と交換で無事に返すからとか、それで浮気のための小遣いが手に入るだとか、考え方がおかしすぎるよ）

はぁと深く溜め息を吐く。

「どしたの？」

心配げな美幸に、真美は愛想笑いを浮かべた。

「ほんとになんでもない……、つていいんだけどねえ」
困ったように校門に目を向けた。

「あれよ、あれ」

「あれって……、ああ、ムツキさん？」

「やつ」

門柱にもたれかかって、待っていたのはムツキであった。

軽く手を挙げて、親しみのある笑顔を見せる。

やたらと真新しいクリーム色のコートを羽織っているのだが、その下のグレーのスーツは酷くよれてしまっていた。

そんなムツキに真美は気色ばんだ様子を見せた。

「暇人が……、犯人はどうしたのよ犯人は」

何も無かったとは言え部屋にまで踏み込まれたのだ。

一番過ごしやすいはずの自室が、いまは気持ちが悪かった。

そんなわけで、真美はかなりささくれ立っていた。

「俺だって捜査がしたいよお……」

そんなお嬢様に、ムツキはがつくりと肩を落とした。美幸が食いつく。

「外されちゃったんですか？」

「どうせ役に立たないからでしょ？」

「違うっつーの！」

地団駄を踏む。

「部長がなにか隠してやがるんだよ！！ それにお嬢さんと顔見知りなのは俺だけだし……」

真美は不機嫌そうに口を尖らせた。

「いつまでも昔のことを……」

「それって……、地下鉄で補導された時の話？」

その時のことを思い出し、真美は顔を赤くした。

「違う！ 上がったり下がったりって、よく分かんないホームを作った公団が悪いのよ……」

あーっと、美幸は何とも言えない表情をした。

「迷子になったんだ」

東京沈没と呼ばれた二十一世紀初頭の混乱、それは海面上昇に伴う液状化と地盤沈下が主な原因となっていた。

これに対し、水没した路線の廃止と再整備は、対処療法的に行われることとなった。

災害は終息したと、何の根拠も無く口にした政治家によって、最初の計画が強行された。

当然のごとく工事は難航した。大都市沈降現象が、なおも続いていたためである。

着工した後も、浸水は広がっていた。何度も計画の変更や見直しが行き返された。

その結果が真美の口にした、『よく分からないホーム』、を作り上げていた。

複雑な通路に、どこに繋がっているのかわからない階段。慣れないものにはまさに迷路であった。

ムツキは諦めるように慇懃に尋ねた。

「それで、今日はどちらにお出かけですか？」

「……そうねえ」

唇に人差し指を当てていやらしく笑う。

「金づるいるから、美幸い、映画でも見に行かない？」

「え、マジで？」

「ちよ、ちよつと待てよ、俺が払うのか！？」

「いいじゃない、経費で落とせば」

「税金をそんな事に使えるかよ！　って聞けよなあ！？」

「やっぱ特撮よね、特撮」

「え〜？ 『誘拐』、もうやってるからそっちにしようよ」

「……あんたね」

「誘拐されそうになったの真美だし」

「わざとだろ？　わざと無視してるだろ、なあ！？」

必死に喚くが聞き入れられない。

女子高生と歩いているというのに違和感が無いのは、精神年齢が近いかもしれない。

ムツキは二人の耳に聞こえるよう、背中を丸めて訴えた。
「せめて割り勘にしてくれ」

無造作にポップコーンを掴んでは口に放り込んで咀嚼する。

暗い劇場内。映画は今まさにクライマックスを迎えており、逃亡する犯人の車は人質の少女を乗せたままで、峠を鋭く下っていた。

「もう少し静かにしたらどうだ？」

男は……、あの橋の欄干に残った黒人だった。彼は純粹に映画を楽しんでいたのだらう、剣呑な目をジムへと向けた。

「……警察の対応が早過ぎなかったか？ サム」

睨み付けるジム。禿頭の黒人は、大げさに肩をすくめて笑って見せた。

「……今時の警官は、中々仕事熱心だって事だな」

サムはジムの声音に、仕方が無いと映画鑑賞に見切りをつけた。

「悪いとは思っている。だからこうして、身柄を引き取ってやったんじゃないか」

サムの物言いに、今度はジムが中折れた。

「出してくれたのは、ありがたいと思っっているさ……」

ちらりと扉に目を走らせる。

どの非常口にもスーツ姿の男達が居た。

空席があるにも関わらず立ち見をしている。

「……俺のマークは外せないのか？」

「警察も神経質になってるってことさ」

「そんな時に会って良いのか？」

「お前の身元は『不明』だからな。後でまいてしまえば、俺もまた身元不明の不審者さ。問題無い」

サムは皮肉るように笑ってソフト帽を深く被った。

隣の席に置いていたコートを腕にかける。

「出るぞ」

「そうだな……」

ちょうど映画は、エンディングに突入した所であった。

「ダメですよムツキさん。あの男の尾行はこっちに任せるって話でしょ？」

劇場ホールの売店前で、ムツキは同僚に掴まっていた。

「はあ？ なに言ってるんだよ」

突然駆け寄って来た同僚に、きょとんとした表情を浮かべる。

ムツキはくいつと顎で女の子達を差し示した。

「これも仕事だよ、仕事」

だがそれはそれでまづいことであつたらしい。

「あー！ 保護命令出てるのにこんな所に、知りませんよ！？」

「わっかんねえ奴だなあ……」

ぼりぼりと頭を搔いて、さらに一言言い放とつと口を開く。

しかしムツキは、ちらりと視界に入った男に言葉を飲み込んだ。

上映の終わり間際に戸をくぐって来た人影に見覚えがあつたからだ。

特にその特徴的なコートには……。

「あいつ！」

ムツキは一瞬で頭に血を上らせた。

黒いコートを着ている青年は、確かに昨日捕まえたはずの容疑者であつたのだから。

「ダメですよムツキさん！」

「離せて！」

「あれえ、なにやってんの？」

「あいつだよ、あいつ！」

「へ？」

真美は目を動かして、こちらの騒ぎを遠く見ている二人連れに気がついた。

「あの人？」

「あいつだよっ、お前を拐おうとしたのは！」

「え！？」

最初は驚いた真美だったが、次第にその顔を怒りに赤く膨らませた。

ずんつと大きく歩を踏み出す。

「文句言つて来る！」

これにはけしかけたムツキの方が慌ててしまった。

「ダメですよ、お嬢さん！」

「あれえ？ どしたの？」

両手にポップコーンのカップを持ったまま美幸も後を追った。

「ちよつとあんた！」

その特別に鍛えられた耳で話を盗み聞いていたジムは、溜め息をつきながら彼女に振り返った。

自分の顎先の高さにある目を真っ直ぐに見返す。

「なにか？」

余りにも鋭い視線と抑えた声だった。

「何かじゃないでしょ！？」

だがそれでも真美の勢いは止められなかった。

飛んで来た真美の唾に顔をしかめる。

「あんたたちのせいで家中泥だらけになったのよ？ どうしてくれるの！」

「文句つてそつちのかい……」

ムツキは一瞬でげそつとやつれた。

「なによ！ 警察は警察で荒らしてくし、掃除するの大変だったんだからね！？ おかげで今日は髪洗えなかったんだから！！」

「朝から髪なんか洗わんでもいいだろう……」

「女の子はそうはいかないの！」

いつの間にやら、相手がムツキにすり変わっている。

はっとした真美は、改めてジムに指を突き付けようとした。

「あれえ？ お父さん」

だがのんびりとした声に勢いを削がれてしまった。

「なにしてんの？ こんな所で」

ぽかんとした顔で、気まずそうに背を向けている父に首を傾げる。
そして青年にも。

「ジムも？」

「お久しぶりです」

小首をかしげていた美幸であつたが、徐々になにかを理解したのか、詰問口調で大声を上げた。

「お父さん！ ジムとなにやってたの！！」

「あ、いや……」

気まずげにサムは身をすくめた。

「ジムも！ またお父さんに、たかつたのね！？」

「いえ、そういうわけでは……」

二人は気まずげに視線を漂わせた。

状況に着いていけないのはムツキたちである。

「知り合いなのか？」

こそつと美幸に尋ねるムツキ。

「そっちはお父さん……、こっちは」

美幸はことさらに大げさな嫌悪感を装った。

「ホームレスのおじさん」

「ふえ！？」

ホームレスと言う表現に、真美が反射的な後ずさりを見せた。

BULLET: 3

この時代、ホームレスという言葉は、二十世紀とは違った意味合いで用いられていた。

九十年代、日本は過剰なまでの税政策を敢行し、これにより住居に対する税金のみならず、あらゆる保険への支払い義務を完遂できない者たちが続出した。

彼らは子が生まれたとしても申し出ない道を選んだ。子供の保育の名目で、さらなる税の支払いを強要されてしまったためである。消費税なども導入されたが、これは独身者を増やすだけに留まった。

夫婦一方の収入では家庭を支えられず、かといって共働きでは共に過ごす時間が少なくなり、子の面倒を見る時間もない。

婚姻の意味がそこにはないからであった。よほど独身で居た方が収入に対して余裕を持て、楽しめる。

社会としてはいびつになる一方であった。

そんな九十年代の歪みが祟りとなって、日本は米国を中心とした三国へと身売りする事になったのである。

現在、孤児や私生児、あるいは人間としての最低限の権利でさえ求められずにいる少年少女が、海面上昇によって放棄された水難地区に溢れることとなった。

子供達のほとんどは難民となつて、米本国へ流れるか、あるいは大陸を目指し半島へ渡るか、あるいはここに独自のコミュニティを形成し、汚らしいものを見るような目で敬遠されて過ごしていた。ホームレスとは、こういった者達のことをひとまとめにする別称となっていた。

(でも……)

真美は盗み見るようにして、ジムの瞳を覗いていた。

(この人が守ってくれたんだよね……?)

でも……と、首を傾げる。

憂いと悲しみ、それに諦め。

眠りに落ちる前に見た瞳とは違うことに、真美はどうしてと訝しむ。

「FBIの……、エージェント!?」

「そうだ」

結局、五人はサムの自宅へと移動した。

リビングのソファーにサムとムツキ、真美と美幸の形で向い合うように座っている。

だがジムだけが一人、窓際に立って庭を眺めていた。

中々に広い庭である。

（懐かしそう?）

真美はジムが醸し出している雰囲気、そんな風に感じ取った。

ホームレスを敷地に立ち入らせるだけでも、なんと陰口を叩かれるのか分らないのが世情である。

実際、美幸も、美幸の母も、彼に対しては良い顔をしなかった。

ムツキが居なければ、間違いなく追い出されていたことだろう。

初対面の人間が居るからこそ、自嘲したのだと想像できた。

（だからかな?）

久しぶりに、上がらせてもらえたのかも知れない。

そのために、懐かしさがこみ上げているのかも知れない。

真美は、そんな風に納得をした。

「こいつが!？」

そんな真美の詮索には関係無く、ムツキは刺すような目をジムへと向けていた。

「じゃあ、夕べのは？」

露骨に責める目を作り、ムツキは隣のサムを睨んだ。

「……情報はあった、だからジムに、万が一に備えてもらった」

「うちに断わりもなくですか!？」

「いや、部長には通してある」

「どうしてこつちまで情報が来ないんです！」

「万が一と言っただろう？ 確実でない情報に、警官を割くわけにも行くまい？」

「しかし」

サムは溜め息を吐いて、ムツキの言及を遮った。

「ジム、お嬢さんを送ってくれ」

「室長！」

ムツキはサムへと食い下がった。

「室長はやめてくれ……、FBIと言っても窓際なんだよ」

サムは改めてジムに命じた。

「彼には俺から理解してもらおう。お嬢さんの帰りが遅くなるとまずいからな。頼むぞ？ 美幸、お前はお茶を淹れ直してくれ」

「はあい」

「ジム」

サムは出て行こうとするジムに一声かけた。

「スペンサーだったんだな？」

瞬間、闇の中で対峙した相手の姿が思い浮かんだ。

顔は見えなかった。だが、驚きから発せられた声は、間違いなく知っている男のものだった。

「ああ……」

重苦しく返事をする。

そうか、と、サムは、タバコを取り出し、火を付けた。

バスにでも乗るのかと思った真美であったが、案内されたのは、さほど離れてはいない表通りであった。

「……助手席に乗ってくれ」

ぶつきらばうな物言いにムツとする。

（しょうがないっか……）

だがその憤慨は溜め息と共に吐き捨てた。先に毛嫌いをして噛み

ついたのは自分なのだから、嫌われるのが当たり前と言うものだと納得をする。

だが、ジムは、そんな真美に、気弱な口調で問いかけた。

「何か……、気に障ったか？」

「別にいい」

4WDのラリーカーであつた、色は白だ。

シートもそれ用でとても固く、真美はお尻が上手く座らないのか、もぞもぞと動かして、落ち着く位置を探し出した。

反対側から運転席の扉を開き、入ったジムに、そういえばホームレスだつけど、真美は気になったことを尋ねた。

「……免許って持つてるの？」

「あると思うのか？」

返つて来たのはもつともなお言葉であつた。

そつよねつと呟きながら、シートベルトを閉める。

だからと言って降りるつもりはないというアピールだった。

「行くぞ」

ジムは真美の視線を感じながらも、車を穏やかにスタートさせた。

美幸の家から官邸までは、それなりに距離があつて離れている。

真美は窓から入って来る風に、車も良いなと表情を和らげていた。普段はバスを利用している。首相と言つても選挙で選ばれているだけの人間だ。その娘だからと言つて、たいそうな車で送迎してもらえるわけではない。

彼女の顔は、流れる景色へと向けられている。

だがその目は、ジムを見つめたまま揺るがない。

（やつぱり……、見た事、あるよね？）

小首を傾げて、真美はジムの瞳に焦点を合わせた。

ちらりと横向いた目と視線がぶつかる。

「何か用か？」

ジムの瞳はまた前を向いた。

「……用が無いなら、そう見つめないでくれるか？ 照れる」
キョトンとした後、真美はいきなり吹き出した。

「……そんなにおかしいか？」

「だって……」

「悪かったな……」

ひとしきり笑った後で、真美はふうと力を抜いて口にした。

「ありがと、あの、あなたでしょ？ ……頭撫でてくれたの」

「そうだ」

探るような言葉であつたが、ジムはごくあつさりと肯定した。

真美の顔を見ようとはしなかった。

「ね？ それで……、どうだった？」

真美は俯きながら頬を染めた。

「なにが？」

「もう！ あたしの寝顔に決まってるじゃない！」

プツと頬を膨らませてジムを見る。

（え？）

しかし真美は予想外のものをそこに見付けた。

「あーっ、照れてる！」

「知るか！」

ジムは照れを護魔化するように口元を手で覆った。

引きつる口元を揉みほぐしていた。

「なあに照れてんの？」

そんな年甲斐もない照れに真美はくすくすと笑った。

映画に出て来るエージェントのような、感情を殺している面が見られない。

こんなに素直に顔に出ていて、つとまるのだろうかとおかしくなつたのだ。

「もしかして……、女の子抱き上げたの始めて？ 付き合つた事も無いの？」

「ない」

ジムはやや憤然としながらもはつきりと答えた。

「どうしてえ？」

ジムは真美の邪気の無い瞳に、冷めた目をしてこう告げた。

「誰がホームレスのことを好きになつてくれるんだ？」

それきり、言葉は途切れてしまった。

「あ、えっと……」

鋭く切り付けられた台詞の意味に、真美は謝ることすら封じられた。

帰宅 自室。

真美はベッドに倒れ伏すと、枕を手繰り寄せて頭に被った。

朝の努力の成果なのだろう、部屋の床に泥靴の跡は無い。

「失敗したあ……」

ホームレスと言えば、薄汚いという印象があつたのだが、ジムにはそれを感じなかった。

だから油断したのかもしれない。調子に乗りすぎてしまったと思う。軽口にしても、失言だった。

ジムに対しては、生理的な嫌悪感を感じない。

だから、違う存在のように捉えてしまっていた。

普通の人のように思えていた。

だから、普通の人と同じ感性で、言葉の意味を受け取ってもらえると錯覚した。

ジムが自分のことをどう思っているのか、それを考えれば、あれはなかったと思うのだ。

ホームレスを口汚なく言葉にすれば、ジムは同じように傷つくだろう。

FBIのエージェントと言っても、ホームレスとしての自覚の方が強いように見える。

真美は父が首相だから……、と言うわけでもないのだが、噂だけは耳にしていた。

特別な仕事を引き受けて、市民権と戸籍を得るために働いている者達がいるということは。

「ジムが……、そうなんだろうな」

カッコいいと思う反面、やはり先行するイメージがあつた。

誰が好きになる？

その通りなのだ、現実に真美とてホームレスを『同列の人間』として数えらずにいた。

「でも……」

昨夜の眼差し、あれに惹かれる自分も存在している。

「そっか、あれって……」

（憧れ？）

真美は彼の瞳に浮かんでいたものを、そんな風に解釈した。

慈しみではなかったと思う。憧れているものを見る目だと思つた方が納得できた。

「……ジムって、いくつなんだろう？」

とりあえず、真美は答えの出そうな疑問へと、思考を切り換えることにした。

BULLET: 4

真美が枕を胸に悶え出して十五分。

ジムはまだ、官邸の麓で電柱にもたれかかっていた。

もう陽も落ちてしまっている。

脇にはラリーカーを停めている。

ジャパンは米国の州でありながらも、一国のような形態をもって存続させられていた。

特異な自治区として知られている。

その首都であるこの街は、湾岸部、市街地、そして山が直線上に並んでいた。

なにをするでもなく時間を潰しているように見える。そんなジムに、話しかける姿があった。

「仕事熱心なことだな」

声の源に目を向ける。電灯の下に姿を見せたのはムツキであった。

「彼女の警護は俺の仕事だぜ？」

ふんつと鼻息荒く自分を指差す。

ジムは無視するようにタバコに火を付けた。

「てめっ!？」

思わず掴みかかるムツキであったが、食い込むはずの指は、コートの意外な硬さに押し返された。

厚いのではない。

硬かった。

ジムは、からむなよと、嘆息した。

「警官は街の平和を守っていればいい」

「だったらてめえこそ大人しくしてろ！」

「時間外労働と残業は無駄に税金を消費する」

「だからって、てめえなんかに任せられるか！」

キキィ！　　つと、急ブレーキの音がした。

殴りかかろうとしたまま、ムツキは突然の眩しさに目をくらませた。

車のライトだった。二人を照らし、タイヤの音を軋ませたのは、昨日の襲撃者達が乗り逃げて行った、あの黒いRV車であった。

そのウインドウは開かれていた。

覗いていた筒を見て、二人はとつさに、ラリーカーの影に飛び込んだ。

連続した発砲音が鳴り響く。

ボンネットに、扉に、窓に銃弾が弾けて穴を穿つ。

「この！」

二人はまるで申し合わせたかの様に、同じ動作で銃を抜いた。

揃えるように並んで屋根の上で狙いを定める。ムツキの銃は支給品だったが、ジムのものは大口径のマグナムであった。

ガン、ガオン！

ムツキの銃の音は、マグナムの轟音に飲み込まれ、かき消される。

「くっ！」

走り去る車に舌打ちして、ジムは穴だらけになった車に乗り込んだ。

「ちっ！」

ムツキも助手席へと飛び込む。

割れた窓ガラスの破片が尻に痛かった。

キキユ！

タイヤを軋ませて、車はターンをする。

銃を握ったままハンドルを操る動きに慣れを見て、ムツキはぶすつと口を尖らせた。

「そのマグナム、携帯許可はあるのか？」

「ない」

「この車は？」

「スクラップから組み上げた」

銃撃戦になるかも知れない。だからシートベルトはかけられない。

ムツキは足をダッシュボードに押し付けて体を固定し、ジムの鋭い目を盗み見た。

（まるつきり、法を無視してやがる。こいつ……）

あるいは法というものを知らないのか、守るべき理由を持たないのか？

そんな考えが、ムツキにジムの生い立ちを想像させた。

「あいつは昨日の残りか？」

「だろうな」

ジムの目はガソリンの残量に向けられていた。

まだ走り出して間もないのだが、ホームレスのジムである。ガソリンはいつも尽きる寸前だった。

ムツキも気がつく。

「……やばいのか？」

「向こうは電気駆動との両用らしい……、燃費を考えても」

「なら無理矢理でも停めるしかないな、右に出られるか？」

「やってみよう」

ジムはさらにペダルを踏んだ、過給器が大きく悲鳴を上げる。

いくら夜の都市外縁部とはいえ、街中であることには変わりはない。

深夜でも無いので交通量も少なくは無かった。

当然、追跡行は先を走るRV車が、一般車両を割って進むことになる。

それに対して、追いかける側は楽なものであった。先行が空けた道に割り込めばいいだけなのだから。

ジムはそれを読んだ上で急加速をかけた、一気に間を詰め、右車線から左に切り換えようとしたRV車のテールをノーズで小突いた。RVは後部を滑らせて安定性を失った。

その立て直しに手間取っている間に、ジムは間隣、右車線を占領して見せた。

「このっ！」

ムツキは小さなりボルバーをタイヤへ構えた。弾層に込めていた六発全部をそこへ撃ちこむ、路面やフェンダーへ逸れたものの、五発目だけが何とか意図した通りにタイヤに当たってバーストを招いた。

キキユツ！　つという音。ゴン！　つと衝突音。

安定性を欠いたRV車は、歩道側の常緑樹へと突っ込んだ。ジムがブレーキを踏む。元々タイヤのグリップ力が足りていなかったのか、滑るように横に向いて停車した。

「死んでないだろうな！」

ムツキは、自分でやっていながら、舌打ちした。

ボンネットが折れ曲がり、木がエンジンルームの半ばにまでめり込んでいる。

二人は車を止め、警戒しながら中から降りた。暫く様子を見る。しかしなんの動きもない。

頷き合ってから、二人は姿勢を低くして近寄った。

官邸。

「バカモンがつ！」

怒声が落ちた。

雷にも匹敵する罵声でもあった。

「お前達の仕事はお嬢様の護衛だろう、何をしていたっ！」

「しかしですねぇ！？」

「俺のミスだ」

ロインとサムの怒りに対し、ムツキとジムは対照的なまでに違う態度を見せていた。

犯人を捕まえて官邸に戻って来た二人を出迎えたのは、官邸につめかけている警官隊であった。

「いきなり撃つて来たんですよ？　野放しにしておけますか！」

「どうしてお前はそう気が短いんだ！」

黄色いテープが張られ、赤色燈がいくつも回転している。

ジムはギリッと唇を噛んだ。

「……ミスは取り返す」

「当たり前だ」

そう言ったのはサムである。

ムツキ達を置いて、ジムとサムは少し離れた。

「美幸が何か知ってるそうだ」

「わかった」

「おい、ちよつと待てよ！」

置いていくなとスがるムツキを、ロインが捕まえる。

「お前はダメだ」

「なんでだよ！」

しばし睨み合うムツキとロイン。

バックではパトライトが目を痛くさせている。

「……警官だと言うことを思い出せ」

ロインが搾り出した言葉はそれだけであつたが、ムツキにはなによりも効く言葉であつた。

そんな彼らを置き去りにして、ジムとサムは、サムの車へと歩み寄つた。

「美幸」

「ジム！」

サムの車の中で小さく震えていた美幸は、戸を開けて話しかけて来たジムの首にしがみついた。

「どうした？」

そんな彼女の背をなでつける。

互いに、昼間とは百八十度態度が違つていた。

美幸はジムに信頼を見せ、ジムは美幸を慈しむように抱きしめる。

「真美が、真美が……」

「わかつてる。俺のミスだ」

髪を擦り付けるように首を振る美幸。

「真美、ジムに謝りたいって言って……」

「謝る？ なにを……」

心当たりがなく、ジムは怪訝そうに首を傾げた。

「……ホームレスだからって、恐がっちゃったって、電話で」

「ああ……」

納得と苦笑を同時に漏らす。

「美幸こそ……、こんな所を見られたらまずいだろ？」

「うん……」

美幸は惜しげに体を離れた。

目は涙で赤くなってしまうていた。

そしてその顔は、再び泣き出す寸前であった。

BULLET:5

低く唸るように、エンジンの震動が体に響く。

真美は、両手首、両足首をガムテープで縛られ、その上でシートベルトによって固定されていた。

「むうー！ー！」

訴えてはみるものの、口を塞いでいるガムテープが邪魔で、くぐもった呻きを漏らすことが精一杯であった。

不格好に固定されてしまっているためか、真美は強ばる体をむずがった。

身じろぎをしてみるのだが、ベルトが食い込み、痛みが増したただけであった。

そんな様子に、誘拐犯が声をかける。

「悪いな。静かにしてくれるなら、口だけは勘弁してやるよ……、どうだ？」

真美は誘拐犯を見た。

そして気がつく。

（このコート……、ジムと同じ？）

熟考の末、真美は頷いた。

コートの色は白った。色違いであるが、サイズのわりに厚みがある所もそっくりだった。

男は苦笑しながら、真美の口に手を伸ばした。

ハンドルを操りながら、べりつと剥がす。

「ぷはっ……」

（臭い……）

勢い込んで吸い込んだエアコンの風に顔をしかめる。

「不安か？」

その様子を、男は勘違いして尋ねた。

「殺しはしない……予定だが、とりあえず餌にはなってもらっ」

「餌？」

「ジムの」

「ジム？」

真美はキョトンとした。

この誘拐は、父親に関するものの続きだと思っていたからだ。

「知らない……、とは言わせない」

それまでは、多少なりとも柔らかかった瞳が鋭くなって、真美を射貫いた。

親しいと、なにか勘違いされているのだと思に至る。

「知ってる……、けど」

躊躇しながらも、おずおずと尋ねる。

「誘拐……、じゃなかったの？」

「ふん」

鼻で笑われた。

「その計画ならおじやんさ」

トンツと、ハンドルの上で人差し指が跳ねた。

「おかげでもつとヤバイ計画が動いてる……。ま、自業自得だと諦めてくれ」

（どういう意味？）

計画について訝しむが、危険な香りを敏感に察して、尋ねることはしなかった。

「ジムは……」

だがそれでも、彼の事だけは気になり、知ろうとする。

真美の足は震えていた。

「どうして、ジムを？」

「知りたいか？」

男はうすら笑いを浮かべて真美を見た。

「じゃあ電話をしている途中で、彼女は襲われたんだな？」

ジムは確認するように美幸に尋ねた。

サムの手はどこにでもあるような白の自家用車で、とくに改造は施されていない。

ドアを閉じて二人きり、ジムは話の内容を外へと漏らさないように気をつけていた。

下手に警察に動かれては困るからだ。

「美幸の悲鳴が聞こえて……、その後に、スペンサーって人がジムに伝えろって」

「スペンサーか」

ジムは噛み締めるように呟いた。

「知ってるの？」

「まあ……」

苦いものを思いしたのか、ジムの柳眉が醜く歪む。

「あいつはな……、スパイだったんだよ」

スペンサーは車を止めて、激情を吐き出すようにハンドルに突っ伏し、語り始めた。

そうでもしなければ事故りそうだったからである。

声が激情によって震えていた。とても運転できる有り様では無かった。

「あの頃……、俺は組織でもそれなりのところに居たんだ」

スペンサーは憤怒に顔を歪ませながら語っていた。

ジムとの間に芽生えた友情、そしてボスの正体について口を滑らせた時のことを。

それはどこかの裏路地だった。

倒壊したビルの、残された壁には、『HOPE!』と赤い文字が書き殴られていた。

二人はその壁にもたれて、ちびたタバコを吹かしていた。

揃いであつらえたお互いのコートは、異臭を放つまでに汚れてい

る。

黒は白くすすけ、白は黒く染まっていた。

色違いの灰色。それでも二人の顔には、笑顔があった。

「親友だと思ってた！ 俺は次のヤマが終われば市民になれるはずだったんだ！ そうなったらお前にも屋根を貸してやるっ、あいつもそうなりやいいって喜んでたのによっ！ なのに！」

怒りに顔が歪んだ。

「ボスは……、そりゃあ汚い事をしたさ。そうしなきゃ市民になれなかったからな。そうやって市民になった人だった。そうやりや人間になれるんだってやってみせてくれた人だった……俺たちの希望だったんだ。わかるか？ わからねえだろうな……、ボスのお嬢さんだってわからなかったろうな……」

声が落ちついて低く抑えられていく。その分、圧力が込められて高ぶりが増していた。

当時その女の子は五歳、小学一年生だった。

「あいつはな！ お嬢さんの鞆に爆弾を仕込んだんだよ！ なんにも知らねえ、わかりもしねえ、お嬢さんの鞆によお！」

ごく普通の住宅地にある、ごく普通の邸宅が、突如として昼日中に吹き飛んだのだ。

「それだけじゃねえ！ 組織に入ってから三年間、あいつは、あいつはな！？ 俺達の仲間を殺して回ってやがったんだよ！」

ある時は一仕事終えた逃亡中に、安心し切った所をナイフで喉を。またある時は市民に紛れて、食事中の所を狙撃して。

「仕事だけじゃねえっ、アジトの情報まで流して……、そうやって自分一人が市民になろうとしてやがったんだよ、同じホームレスのくせによおっ！」

それが工作員であると言うことなのだろうと、真美はなんとなく想像ができた。

「は、はは……、ボスの事を漏らしたおかげで、俺も危なくなっただけ？ ヤバい仕事ばかり引き受けて来たさ……、今度は首相を脅そ

うって計画だった。これで俺はもう一度やり直せるはずだった！
なのになあいつだ！！」

（ひっ！）

ダンッとハンドルに叩きつけられた拳に身をすくませる。

「あいつを殺す」

スペンサーは呪詛を吐くように宣言した。

「それで何もかも清算してやる」

（狂ってる）

タベ見た、ジムのものとはまるで正反対の瞳に真美は脅えた。

そこには優しさなどかけらも見えない、あまりにも何もかもがジムとは違っている男であった。

（ジム！）

真美は恐さから、ギョツと目を閉じた。

スペンサーに語られたジムの像よりも、彼女は自分の瞳に映ったものを信じていた。

BULLET: 6

「ここ、か……」

美幸へと残されたスペンサーの伝言に従い、ジムは隣県との境になっっている、山中へと車を乗り入れた。

州でありながら、その中には都道府県があり、幾つかは日本のような横文字や、他国語の名称へと変更を受けている。

一国が、戦争ではない形で消失したことへの混乱が、そのような部分に現れていた。

強制や、圧力による統治という形が取られず、民主的な配慮がなされたために、このような混沌を招いてしまっていた。

鉄道線路の上に立つ。もうすぐ始発がやって来るだろう、朝もやの中で、ジムは敷き詰められている砂利と枕木を踏んで進んでいく。「ジム！」

霧の向こうに真美がいた、パイプ椅子の背にテープで括られて座らされていた。

暴れる度にガタガタと椅子は激しく揺れる。

彼女の顔に浮かんでいる不安と安堵に、ジムは頬を引き締めた。

「よう、ジム」

その隣には彼もいた。ジムはゆっくりと脇の下から銃を抜いた。

「スペンサー……」

「おっと、これが何か……わかるかな？」

おどけるように、真美の足元を爪先で示した。

テープでまとめられた足首の真横、椅子の足に何か別のものが巻き付けられている。

「C4か……」

「そう、で、起爆装置はここだ」

左手を挙げる。

「このスイッチを離せば十五分でドカンだ」

「十五分？」

「そうだ。長いだろ？ チャンスをやるよ」

タン！ と、ジムの足元で銃弾が跳ねた。

「チャンスだと？」

スペンサーの右手にある銃を、剣呑に見やる。

スペンサーはその銃口を揺らして見せた。

「面白いだろう？ 政府の犬と敵が、同じ市民権つてえ餌に釣られて争うんだ。もっとも」

揺らしていた銃口を、ジムの眉間へとぴたりと合わせる。

「俺はもう、市民にはなれないだろうけどな？」

引き金が引かれるよりも一瞬早く、ジムは右へと跳んでいた。

美幸は、行かせて良かったのかと悩んでいた。

だが他に頼ることもできなかった。

（ジム……）

父の隣で、車中で、美幸はジムとの会話を回想する。

あたしのママも、ホームレスだったけど。

「詳しく話したこと、なかったよね？」

おどおど脅えた目を向けると、ジムが優しい目をして、先を促していた。

美幸の母親は、サムの妻ではない。

別の人間であつたし、父親もまた違っていた。

サムの一家と美幸とは、血が繋がっていなかった。

その屋根無しの親子は、雨が降ってもずぶ濡れになって過ごしていた。

母を見上げる娘は、悪寒を堪えて唇を真っ青にしてふるわせていた。が、それは母親も同じであつたし、どうしようもない事柄でもあつたのだ。

軒先を借りることさえ許されずに、二人は薄汚れた服を着て歩い

ていた。

その服は、死んだホームレスからの租借品である。自分たちが死んだ時には、剥ぎ取られ、また別の誰かの手に渡るのであるものであった。

その街は、そうした形が当たり前の事柄であった。

「でも、それをパパが拾ってくれた……」

美幸は、まるでこれまでの態度を償うように、告白を続けた。

『ヘイ！』

ジャパン支部に派遣され、サムが見たのは、本国のスラムよりも酷い世界であった。

排他的なジャパンという州は、前世紀の政策による被害者である彼らを、救うどころか、ただ生活圏から追い立て、追い出し、清潔に『清掃』するだけの方策を推し奨めていたのだった。

そこには、人道的な見地など存在してはいなかった。

そうやって、危険地帯として封鎖された区域へと追いやられていった者たちは、病や、飢えや、苦しみのために狂うか、壊れるか、死んで行く。

「あんまり気持ちのいいものじゃなかったよ」

「サム……」

「コーヒー、飲むだろ？」

運転席に乗り込んで、サムは二人それぞれにカップを渡した。

美幸はジムの胸に擦り寄ったままで、両手でカップを受け取った。

「暖かいね……」

「ああ……」

美幸の呟きに答えたのはサムだった。

「……俺がライトを当てながら近寄るとな？ 美佐子が……、美幸の母親なんだが、飛び掛かって来たんだよ、逃げろって叫びながらな？」

土砂降りの雨の中、サムは美佐子に組み倒されて、どうしたらいいものか慌てたと言った。

痩せこけた女の何処に、これほどの力があるのかと、疑うような
気迫であったが……跳ねのけるのは簡単だった。だが、それをため
らわせるものがあつたのだ。

細過ぎる腕が、あっさりと折れてしまいそうで恐かつたのだと言
う。

サムは首を締められても、結局は耐えたという。
握力のなさを、哀れむ余裕もあつたというのだ。

それほどに美幸の実母はやせ衰えていた。

「それで？」

「大荒れさ」

肩をすくめる。

「美佐子は話を聞ききやしないし、美幸は泣き喚いて動こうとしな
いし」

「……で、引き取つたのか」

「ああ、美佐子は無理だつたが……」

「ああ……」

気がつけば美幸の体が震え始めていた。

コーヒーが縁からこぼれる。跳ねたものが、ジムのシャツに染み
を作る。

ジムは腰に腕を回して抱き寄せた。

寒気を打ち払えるよう、体をさすって温めてやる。

それはまるで、妹に、血を別けた肉親に対して、接しているよう
であつた。

「『美幸』……、か」

ビクリと、『美幸』を名乗っていた少女が脅えた。

「……もう死んだものだと思ってるよ、行方不明になって十年だ」
美幸とは、サムの実子の名前であつて、それは彼女の本名ではな
かつた。

行方不明となっている『美幸』の戸籍は、現在は彼女のために用
いられている。

「恐いの……」

今、ここに居る美幸は、一層震えた。

「真美……、あたしを親友だって言ってくれてるけど、あたし、パパの子供だってふりをして……、バレたらどうなるのかって、それを考えると」

何も言えない、言えるはずが無かった。

消息不明の女の子の戸籍を借りている偽りの存在などと、どうして告白できるだろうか？

美幸の正体は、市民のふりをして紛れ込んでいる、ホームレスである。

これは重罪であった。ジャパンにおいて、ホームレスに市民権は与えられていない。

不法滞在者であり、人権は認められていないのだ。

そんな存在が、成り代わりを演じて、市民権を悪用していることになるのだから。

美幸は、だからこそ、ホームレスに共感を抱いたり、近寄ってはならないのだと、自分を戒めていた。

決して気付かれてはならない、悟られてはならないことであるから……。だから、表向き、美幸は過剰なまでにジムを嫌って見せていたのである。

心ですまないと、詫びながら。

蔑みの言葉が、全て自分にも当てはまるものと、傷つきながら。

「やめてえ！」

悲鳴を上げる真美の前で、二本のナイフが甲高い音をぶつけ合った。

アーミーナイフを逆手に持つスペンサーと、ナックル付きのコンバットナイフを絶えず繰り出すジム。

お互いの顔には、異常なまでの憎悪が張り付いていた。

スペンサーは殴りつけるついでのように振るい、ジムのコートの胸を裂いた。

「くう！」

ジムもまた一步下がりがながら、下から上へと斬り上げた。

ビーツと、スペンサーのコートに裂け目が生まれる。

「ふっ、あ！」

それでも、恐れもしないで、スペンサーは間合いを詰めて蹴りを放った。不安定な状態で受け止めたジムは、派手に砂利の上を転がされることとなった。

「お前もっ！」

一回転して起き上がるジムに、スペンサーはボールを飛ばすような蹴りを放った。

「俺と落ちろ！」

ジムは脇に引いていたナイフを突き出した。

スペンサーの足に細い筋が入り、直後にぱっくりと切れて血が溢れ出した。

真美は泣きじゃくり、叫んだ。

「どうしてそんなに市民になりたいの！？ おかしいわよ！」

自分にとって当たり前のこと、それが殺し合いを演じてまで奪い合わなければならないのだと、真美には理解できなかった。

スペンサーはそんなお嬢様に簡潔に答えた。

「『市民』じゃなきゃ、『人間』じゃないからだよっ、なあ、ジム！」

血が流れたぐらいでは怯まない、斬られた瞬間は熱くとも、銃で撃たれたわけではないのだから。

それ程には、痛みもショックも来はしない。

二人はその程度の痛みに堪えるだけの精神力を持ち合わせていた。持たなければ生きて来れなかった。彼らにとって、この程度は慣れていて当然のものであった。

「教えてやれよ！ 俺達は……、ゴキブリやドブネズミよりも惨め

に生きて来たってなあ！」

二人のナイフは閃き合った、その様な環境で培われて来た精神は、痛みなど無視できるようなものだという、特異な認識を与えていた。切っ先が触れ合う度に生理的な嫌悪感をもよおす硬質な音が響き出る。

ジムは目の前の狂気に集中しながらも、心でスペンサーに応えていた。

（そうだ、俺も懂れていたよ……）

ナイフの煌めきの中に、様々な記憶が垣間見えた。初めてサムに会った日のことが。

サムが、結婚したと指輪を見せてくれた時の驚きが。

娘が生まれたと、だらしなく目尻を下げた喜びの表情が。

誘拐された時の号泣、嘆きと悲しみと、崩れ落ちている夫婦の姿が。

（すまない、サム！）

ジムはサムの娘の行方を知っていた。

他ならぬ彼女を見付けたのはジムだったからだ。

貯水層の中で、ガスによって膨れ上がっていた。

ウジも沸いていた。

目玉から口から虫が沸いていた、耳からもこぼれていた。

それでもその顔を見た時に、ジムにはその子が『美幸』であるとわかってしまった。

例え認めたくなかったとしてもだ。

FBIに対する見せしめの行為であった。そのためにサムの娘は狙われたのだ。

変わり果てた彼女を抱きしめた時に、ジムの中で何かが切れた。壊れて、砕けた。

計画の首謀者をつきとめたジムは、同じ苦しみを味合わせるために……。

（自業自得だ）

その男の子供も、関係の無い存在であった。だがそれがどうしたというのだろうか？

子供の鞆に爆弾を忍び込ませ、その日、そのごく普通の家庭を、ジャパンから永遠に消し去った。

『美幸』の仇を討つために。

そして、それからジムは、ひたすら人殺しを続けて来た。

終わりなど、いつしか気にしなくなっていた。

市民などという夢も見なくなっていた。

大切な何かが失われたから。

壊されたから。

腕に熱く焼けるような痛みが走った、血も滲む。

痛みが現実へと引き戻す。

それさえもジムは怒りに変えた。

記憶を蘇らせることさえ許さないのかと。

（お前らがくり返すから！）

ジムは気力をさらに高ぶらせていった。

BULLET:7

「くっ、う！」

自在に繰り出されるナイフをかるうじて避け、ジムはお返しとばかりにスペンサーの頬を浅く裂いた。

朝日に、鮮烈に血が光る。

「そんなに市民になりたいのなら、お父さんをお願いしてあげるからあ！」

泣き叫びが霧を散らすように辺りに響いた。

真美は……頬を、腕を、足を、撫でるように裂かれ、血でまみれた男達に恐怖していた。

一つの傷ができる度に、痛みを想像してすくみ上がってしまっていた。

そんな真美を肩越しに見て、スペンサーは「ははっ！」と笑った。

「聞いたか？ 市民にしてくれるんだとさ！」

「ああ！」

ナイフを繰り出すと見せての左拳にジムはよろけた。

「国が、……俺達を捨てやがった国がくれなかったものを、お嬢さんが『パパ』にお願ひしてくれるんだとさ、ふざけるなあ！」

ナイフを順手に持ち変える。

「税金が払えなきや市民じゃねえ！ 保証もなんにもしてくれねえっ、助けてもくれなかった奴らが、首相令嬢の『お願い』を聞いてくれるわけねえだろうが！」

突き出されたナイフがジムの左腕を深くえぐった。

（動脈、切れたか！？）

吹き出した血に焦るが、ジムは考え過ぎだとねじ伏せた。

「自分の男と、母親の男と、どっちが勝つかよく見てろ！」

（耳鳴りがしやがる……）

ジムは、それも気のせいだと思つことにした、が……。

（違う！）

ジムは、はっとスペンサーの、さらには真美の背後に目をやった。

「始発か！？」

「え！？」

ジムの声に背後に顔を向ける真美。

「嫌だ、ちよつとお！」

ガタガタと椅子を揺らして逃げようとするのだが……。

「きゃ！」

その場で倒れてしまった。

「嫌あ！」

電車が迫つて来る。耳鳴りの正体は列車の発する音だった。機関員は線路上の『物体』に気がついていない。

まだ、霧が晴れきつておらず、見えていなかった。

（轢かれる！）

真美はギュツと目を閉じた。

「真美！」

ぐいつと引かれる感じ、間一髪、転がった脇を列車が駆け抜けていった。

真美は、何故、どうしてと、目を丸くして、自分を引っ張ってくれた恩人に驚いていた。

「美幸！？」

「よかった、間に合つて……」

ふうつと息をつく。

「くっ！」

「ジム！」

美幸の叫びにハツとする。

「ジム！」

ジムは左手でナイフを払いのけていた。

切られた腕は上手く動かず、盾の代わりに振り回すしかなかった

ようだ。

ゴッ！

さらに、体勢の崩れたスペンサーの頬を、ナイフのナックルで殴り付けもした。

ゴォン！

爆風が、真美を、美幸を、ジムを、そしてスペンサーを吹き飛ばした。

（もう十五分経ったのか！？）

ジムは焦りを交えて、真美と美幸の姿を探した。

煙のわりには炎が少ない。それは正しく、爆発したのは真美の椅子のものと別爆発物であった。

はっとする。

「スペンサー！」

吠える。

姿が消えていた。車の走行音が遠ざかっていく。

爆発したのは、ただの煙幕弾だった。

「……逃げる気か？」

「ジム！」

車が線路に乗り上げて来た。

ウィンドウを開き、サムが叫ぶ。

「乗れ！」

「ああっ！」

「あ、置いてかないで！」

ジムは行きかけて、慌てて真美の元へと駆け戻り、血まみれのナイフで拘束テープを切り裂いた。

「大丈夫か？」

「ああ」

運転は任せて、ジムはコートを脱いで丸めた。

ひとつ、背後で二つほど小さい悲鳴が上がったが、気にしている
余裕は無い。

左腕半ばから、血がじわりと滲み出している。

「深いな？」

眉をひそめて、サムが尋ねる。

「血管は？」

「いける、切れてない」

指を使って傷口広げ、確認し、ジムは信じられないような行動に出た。

「やだ!？」

二人の少女は目を閉じた。

じゅっと、嫌な音がした、次いで肉の焼ける香りが鼻孔をくすぐる。

カーライターを押し当てて傷口を焼いて溶接したのだ。

車内に嫌な匂いが充満する、うげっと真美と美幸は口を押さえて窓を開けた。

ルームミラーで、えずく子供たちに顔をしかめ、隣の男に自重しろという。

「……派手に動くとまた開くぞ？」

「その前になんとかする」

わかっていて焼いたとは言え、熱くなかったわけではない。

頬が引きつって上手くは喋れないようだった。

「無理をするな、お嬢さんは取り戻したんだ」

「だめだ」

ジムは首を振った。

さらに脇のホルスターから銃を抜く。

「ここで逃がせば、あいつは何度でもやって来る」

決意を孕んだ言葉に、真美は弾ける様に顔を上げた。

「ねえ？ どうしてそんなに市民になりたいの!？」

美幸に縋り付いて泣きながら尋ねる。

「今だつてみんなと一緒でしょ？ お店に入つて、普通にご飯を食べて、ねえ？ どうして市民になりたいの！」

ぎゅつと……、力が籠った。

美幸の腕に。

「美幸？」

抱く腕に込められた力に、真美は美幸の顔を見上げた。

そこには、真美の知らない美幸が居た。

酷く辛そうに唇を引き結ぶ、知らない女の子の顔があつた。

「……誰も、守ってくれないもの」

「え？」

くぐもつた声には、やけに実感が籠っていた。

「……殴られようと、犯されようと、死んでも、生ゴミ扱い。それがわたしたち、ホームレスよ」

「美幸？」

（わたしたち？）

真美は美幸の話を理解できなかった。

まさか、美幸の正体が、ホームレスの女の子だと、想像もしていなかったからである。

「ホームレスにはね？ 人権が無いの」
ぽたぽたと……。

真美の手に雫が落ちて来た。

「美幸……、泣いてるの？」

美幸の目元を拭つてやる。

その手を、美幸ははね除けた。

「人殺しになつても百倍もマシなのよ、市民つて！」

サムは、困惑している真美に暴露した。

「美幸はホームレスの女の子なんだよ……俺の子じゃない」

「サムおじさん？」

過多の情報に、真美の頭はこんがらがってしまった。

「美幸が……、ホームレス？」

だって、と、サムを見る。

「俺が拾って、行方不明になった娘の代わりにした」

「代わり？」

「……そんなもんだよ。人口だけが過剰で、物価が高く、だが就労場所を提供できない。しかし本国政府の期待に応えるためには、多大な税収入を確保しなければならない。金満国家の伝説を当てにして、アメリカは日本を買い取ったんだからな？ ジャパンはそれに応える義務があるのさ。それがジャパンなんだ、わかるか？」

真美は青い顔をして首をフルフルと振った。

「……わかれよ。税金と保険料、その他、金を収められるやつだけが人間なんだ。金づるとして存在意義を認められてるだけなんだよだから、金払いのいい連中を……『市民』を養うのが精一杯で、それ以外を救ってやってる余裕なんてない。それがジャパンって州の正体だ」

「パパ……」

苦渋を浮かべるサムに、美幸も胸の痛むような声を漏らした。

「……だがな？」

一転、サムは安心させる様に声を和らげた。

「俺は美幸を……、『加奈子』と呼べなくても、美幸の代わりなんかじゃない、俺の娘だと思ってる」

「うん……」

美幸は顔を伏せるように、前席の背に額を押し付けた。

「美幸……、泣かないで」

ぽたぽたと滴が跳ねる。

真美は見えていられなくて、美幸の背をそつと撫でた。

「お前も……、もういいんじゃないのか？」

そんな二人をルームミラー越しに微笑んでから、サムはジムへと話を振った。

「……俺はもういいんだ。美幸だってこんなことを望んじやいない」「それを決めるのは俺だ」

「俺が知らないとも思ってるのか？」

一瞬、空白の時間が生じた。

「美幸……、お前が見付けて、埋めたんだろう？」

車内が沈黙で満たされた。

「知ってたのか？」

「やっぱりか……」

ジムはちつと舌打ちして、顔を背けた。

「わかつてはいたさ……、あれほど殺しを避けていたお前が、突然……、おかしいってな」

「そうか」

話しながらも準備は進める、ジムは血糊の付いたナイフをコート
の裾で拭った。輝きを確かめる。

そこに映るサムは顔をしかめていた。

「美幸はもう帰って来ない、それが事実だ」

「わかつているさ」

「わかつてないだろう？」

サムは剣呑な目を向ける。

「美幸が本当に、お前がそんな風になることを望んでると思ってる
のか？」

ピタリと……。

サムの喉元に、ジムの持つ白刃が当てられた。

堪えきれずに漏れ出す殺気が、黙れと、何よりも雄弁に物語って
いた。

「……遠足を楽しみにして、弁当箱を買って、……許せるわけがな
いだろう？」

初めての遠足だと、小学校に入っただけで、はしゃいでいた。

「お前が殺し屋になって喜ぶと思ったのか？」

「望んでないのはあんただろう」

ジムは刃を当てたままで吐き捨てた。

「人殺しまでさせる気は無かった？ 汚い仕事はさせても、最後の

「一線だけは越えさせるつもりはなかった？　なんて言うなよ？」

ナイフを引き、背中側の鞘へと、ぐつとはめ込む。

「潜入調査って名目のスパイが欲しかったんだろ？　情報を流すだけで殺しをやらせるつもりはなかった？　違うな、あんたは結局、俺が殺しに慣れていくのが辛いんだろう？」

続いて銃を抜き、弾層と予備のマガジンを確認する。

さらにジムは、ダッシュボードから、勝手に弾を持ち出しにかかった。

サムは吐き出すように、重く、答えた。

「ああ……、そうだ」

サムは本音を持ち出した。

「市民として登録されていないお前なら……、確かに誰を殺したって罪には問われんよ。ジムなんて人間は存在してないんだから。存在しない人間を捕まえることはできない。だがな、お前は許せるのか！？」

「……前を見てろよ」

「自分を許せるのか！？　美幸に会わせる顔があるのか？　答えろ

！」

「復讐なんかじゃない」

「じゃあなんだ！」

「懂れだった」

「なに？」

道が混んできている。朝の通勤ラッシュが始まりつつある。

サムはちらちらと横を向く。しかし俯いたジムの顔はよく見えな

い。

「白い家、幸せな家族、すすくと育っていく赤ん坊……。あんたは俺の理想だった」

ジムは背筋を伸ばすように仰向いた。
ばさりと髪が後ろへ流れる。

「だから……、許せなかったんだ」

カートリッジを戻し、スライドさせて弾を装填する。

その目は、銃に宿っている死だけを見ている。

「……幸せを壊して、のうのうと生きてる奴らが許せなかった」
ゆっくりと前を向く。

グリップを両手で握り、銃口を額に当てて祈るようにジムは目を閉じた。

「……結局、お前の勝手な想いでやったことだと言っただな？」

「そうだ」

ジムの口から、熱い息と共に、復讐の言葉が吐き出された。

「美幸のためなんかじゃない。俺から美幸を奪ったあいつらを、俺は絶対に許さない」

ジムは呪いを掛けるように、ゆっくりと全てを思い出していった、忘れかけていた感情を。

サムに、初めて美幸を抱かせてもらった時のことを。

ホームレスの自分だと遠慮した。だがサムも、彼の妻も、ジムは家族だからと許してくれた。

とても小さな命だった。

だのに、まだ赤ん坊だというのに、命は溢れてこぼれていた。
落としかけて、笑い声が上がって、泣き出されて、慌てて。

それでもだあだあと……。

（そうだ、思い出せ！）

市民もホームレスもなく、無邪気に、等しく愛してくれた幼い少女を。

（思い出せ！）

ジムの瞳から、優しいものが、くしけずられていく。

（俺は、奴らを、許さない）

ジムはホルスターに銃を戻した。

BULLET：8

山中の材木置き場にヘリが待機していた。

報道用のヘリにカモフラージュしてはいるのだが、助手席側の隅に大口径のライフルが銃身を覗かせている。

ローターが回転し、木屑を巻き上げて散布していた。

「ジムが来る、足留めを頼む」

「はい！」

三人ほどがライフルを持って散って行く。

それを見てから、スペンサーはヘリへと乗り込んだ。

誰も疑問には思わなかった。殺せ、ではなく、足止めと口にした彼の心理に。

そこには微妙な本音が見え隠れしていた。

タイヤの軋む音が耳に聞こえる。

「頼んだぞ！」

リーダーらしくない発破をかけて、スペンサーはパイロットに上昇を命じた。

蜘蛛の巣状のヒビがフロントガラスに刻まれた。

サムが急なハンドルを切る。

「きゃああああああ！」

少女達は伏せたまま、遠心力によってシートの上を転げ回った。どれが自分の手だか足だかもわからなくなるほどに絡まって。

「ジム！」

ターン中に、ドアを開けて飛び出していった。

「無茶を！」

車が半回転したところで、サムはアクセルを踏んだ。尻を晒して遁走にかかる。

「おじさん！」

「パパ！」

「ダメだ！」

バックミラーで撃ち合いを確認できた。

切ってしまうほどに唇を噛んで、サムは車を遠ざけた。

ジムはコートの前を合わせ、腕を曲げて頭を庇った。

そのまま身を低くして突っ走る。

バスバスと何発か当たった。しかし防弾仕様のコートは、衝撃だけを体に伝える。

懐から銃を抜き、曲げた腕の隙間から銃口を覗かせ、適当に撃つ。しかしその様に身を庇いながらでは、狙いも雑になってしまう。

相手もそれをわかっているからこそ、材木の影に隠れもしない。

（奴は何処だ！？）

ジムは、手短な木材の山に身を潜めた。

走りながら、一通り目にした景色を、頭の中で反芻する。

積み上げられた材木の山、砂砂利、プレハブの建物に、トラック。思い浮かべて、敵がどこを守ろうとしているか、当たりをつける。が、その思考を遮る爆音が轟いた。

「ヘリ！？」

空を見上げると、低空をかすめるように、警察のヘリが通り過ぎていった。

降下しかけたところで、何かを見つけ、追いかかったようであった。

ジムは勘を働かせた。

舌打ちをする。警察が追ったのは、空を飛ぶ何かか、地面を走る物だと想像ができたからである。

なら、スペンサーは、それに乗っているだろう。

「くそっ！」

自棄になったジムの真近くに、敵からの銃弾がプレゼントされた。

「もつと寄せろ！」

ムツキは、ライフルを構えながら、パイロットを叱り付けた。ヘリに乗っていたのはムツキであった。

警察のヘリは、対空戦を行えるようにはできていない。

ムツキは、安全を無視してドアを開けた。

速度の都合で、抵抗が凄く、ヘリはバランスを失い、姿勢を崩す。

「空中戦なんて、無理ですよ！」

パイロットが泣き言をわめく。

「閉めて下さい、落ちたいんですか！」

「やって見なきゃだろ！ まだ一発も撃ってないんだ、横寄せろ！」
「車じゃないんですから！」

ムツキは無視して、特製のゴーグルを目にかけた。

その内側は特殊なディスプレイになっていて、ライフルのスコアと光ファイバーケーブルによって繋がれている。

風速や距離なども表示されていた。コンピューターが自動的に、対象とするものを捉えて、照準位置を補正していく。

絞るように、引き金の指に力を入れる。

「うわっ！」

急にヘリを傾けられて、慌ててトリガーから指を外す。

「どうした！？」

「撃って来ました！」

「そりゃそうだろ！？」

だが、突然として、正面のガラスにヒビが入れば、それは焦りもするだろう。

割れたり、銃弾が飛び込んで来なかったただけでも、運が良かった。ムツキは毒づきながら、銃を納めた。

「やっぱ無理か」

「当たり前でしょう!？」

ムツキが諦めてくれたことにほっとして、機体を遠ざけながら、パイロットは漏らした。

「何処へ行く気ですかね？」

「知るか！」

「……あのへりなら、海を越えられるでしょうね」

「伊豆諸島へ渡る気か？」

低空で飛ぶへりを追跡できる様なシステムは警察にはない。

それに、途中で船にでも乗り換えられたら、また厄介なことになる。

伊豆沖の島には、ホームレスとも違った、独自のコミュニティが存在しているのだ。

例えば列島に戻ってくれたとしても、ムツキたちが持っているのは、ジャパンでの捜査権である。

中国、ロシアの監督支配地域へと入り込まれたら、彼らには諦めるほか結論がなかった。

「厄介な……」

上からの捜査打ちきり予告が、聞こえてくるようだった。

「その前に墜とおす！」

「だからどうやって!？」

「知るか! とにかく逃がすんじゃない! 絶対に追い詰めてやる!」

パイロットの溜め息よりも、ムツキの鼻息の方が荒かった。

BULLET:9

枝道から、跳ねるように車が飛び出す。

アスファルトにタイヤの跡を擦り残し、車は公道へ乗り入れ、加速をかけた。

必死の形相でハンドルを操りながら、サムは上空を通り過ぎていったへりを横目に追っていた。

（警察？ ロインの奴、余計なことを）

シートの間から真美が身を乗り出して訴えた。

「おじさん戻って！」

だが何かを思い詰めているらしいサムは、真美の声など雑音程度に聞き流した。

真美は身を引いて、後部の窓に張り付いた。

車はどんどんと遠ざかる。そこに居るはずの誰かを置き去りにして。

（こんなのってない！）

不条理の一言が思い浮かぶ。

車内に残る嫌な、焼けた肉の臭いが、ジムの凶行を思い出させる。傷口を溶接するような、痛みに対する無頓着さ。

そんなものが、どうすれば生まれ出るのか理解できない。

そのような、理解できない生き方をしてきたのが……。

「ジム……」

ルームミラー越しに見た、銃口へと祈る彼の姿が蘇ってくる。

（違う、あんなの、ジムじゃない……）

真美はそんなジムと、誘拐事件の時に瞳をのぞき込んでくれたジムとの間に、気妙なズレがあると感じていた。

あの優しい目をした人を狂わせる何かとは、何なのだろうか？
だから、尋ねる。

「ねえ……」

真美は尋ねた……美幸へと。

「市民権って……そんなに良いものなの？」

本当にわからなかったのだ。

生まれたときから当たり前のように持たされていて、そんなものの存在など確認したことすらないのだから。

美幸は……迷うように視線を漂わせた後で、コクリと頷いた。

「なかったら……」

美幸は俯いて、前髪を垂らしてで顔を隠した。

「なかったら、あたしたちは、野良猫以下だもん」

そこには、凄まじいまでの実感が込められていた。

「……ゴミを漁って、自動販売機やお店を荒らして、追い立てられて……それでもしないと、生きていけなくて」

「だからって……」

美幸は怒りを込めて吐き出した。

「でもそうしないとっ、ジムが好きでやってると思ってるの!？」

『美幸ちゃん』みたいに殺されちゃう子が……、真美だってそうな
ってたかもしれないのに! あたしだって」

えつぐと、しゃくり上げる。

「『美幸ちゃん』を、殺してる……」

ぐつと詰まる、何も言い返せなかった。

加奈子という子が、美幸として存在することで、本物の美幸の存在は無かったものになっている。

もし本物の美幸が生きていたなら? その子が帰ってきたなら、
彼女はなんと言っただろうか?

実の父母ですら、代替え品を娘として扱っているのを見て、娘は
行方不明になっっていないと、なかったことにしているのを見て、
なんと口にするだろうか?

真美とて、本当なら昨夜の内に、殺されていたかも知れなかった。
そうならなくてすんだのは、ジムのような不正規の存在があった
からだ。

代わりに怪我をして、させられている人間が居たからだ。

美幸は語る。

「あたしたちなんて、蚊やゴキブリと同じだよ……うつつしくて
も、見逃してくれる？ うざったいって、追い払うでしょ？ 叩く
でしょ？ ……殺すでしょ？」

同じ生き物ではないのと言う。

「お風呂にも入ってないような、臭いだけでむせて吐きそうになる
人を抱きしめられる？ 遠ざかるでしょ？」

だったらと言う。

「同じ『人間』として、見てもらえるように、しないと……」

真美を見る。

「真美が、ジムに、どうしてって思うのって、ホームレスに見えな
いからでしょ？ あたしにだって、そうは思わないのは、あたした
ちが、同じ人間に見てもらえるようにしてるからじゃないの？」

だから、悩んでくれるんでしょう？ と、彼女は問うた。

人間って、なんだろう？

真美はそんなことを考えた。

実際、そうだろうと思ったからだ。ジムが守ってくれた。助けて
くれた。

優しくしてくれた。だからこそ、彼のことが気になるのだろう。

これがただのホームレスであつたなら、どうだろうか？

銃で撃ち合い、ナイフで斬り合う。ホームレスとはそういう人た
ちなのだと思うのなら、いなくなれば良いと思うのではないのだろ
うか？

迷惑だと、怖いと思うのが普通だろう。

（ママ……、心配してるかな）

唐突に、思い出す。

ほんの脅しだと、小遣い稼ぎだと騙されて、乗せられたのだとい
う母親のことが。

小遣い稼ぎに、狂言誘拐を企み、父から大金をせしめようとした

母。

どれだけ平和ボケをしているのかと問いたくなる。
だがそれが、美幸の言う、市民権を持った人間なのだと、気がつ
いた。

（なにをしたって、昨日と同じ今日があって、今日と同じ明日が来
るって、なんの保障もないのに信じられるようなゆとりがあるから、
そんなことだってできちゃうんだ……）

必死に生きていないから。

がむしゃらに生きる必要もないから。

狂言誘拐すらも、日々の刺激程度に思えるのだろっ。

保護や保障を与えられ、なんの不安もなく生きている。

なにもなくなりはいしない、失うことはない。

そんな信仰を支えているのが……。

（市民権）

沈黙が満ちる。それを打ち破ったのはサムへの連絡であつた。

「……わかった」

携帯電話を胸ポケットへとしまい込む。

「……まだ、なにかあるの？」

真美は恐いながらも尋ねた。

ここまで来ては、もう無関心ではいられなかった。

サムは重苦しく吐息をこぼした。

「……旧東京湾沿岸に浮かんでいたタンカーが動き出したらしい。
奴らは街を火の海にするつもりだ」

真美はゾッと青くなった。

『おかげでもっとヤバい計画が』

スペンサーが口にした、意味のわからなかった皮肉について思い
出す。

「そんな!？」

「テロリストを気取ったって、奴らは素人の集団だからな。世間に
訴えるとかなんとか、くそ！やる事が極端なんだよ！」

サムの焦りに、真美は掠れた声を出した。

「そんな……、嘘でしょ？」

「嘘なもんか」

サムは真実味を持たせるために声を抑えた。

「もうあと何時間か後には、旧東京湾岸部は火の海だ」

「け、警察は……」

「……警察は『手順』があるから即応できない。今頃沿岸警備隊との折衝で泡食ってるだろうな」

「どうしよう……、どうしよう!？」

だから……という。

「……あいつに頼るしかない」

サムはそう言って車をターンさせた。

「きゃ!？」

真美は、倒れ込んできた美幸に驚いた。

「美幸？」

顔面蒼白、その上で、美幸は己の体を抱いて震えていた。

「また……、まだお兄ちゃんに」

「ああ」

サムは娘に対しても容赦が無かった。

「人殺しをさせたくないなんて、確かに偽善だったな……」

それがどういう意味なのか？

美幸の憤りを真美が奪う。

「だったらっ、州兵とか、だつて!」

ジムでなくても　その希望は碎かれる。

「本国の指示で動きやしないさ」

「どうして!？」

「中露への警戒で精一杯だからな」

「そんな!」

真美の頭の中に、先程の血で塗れ合う二人の様が蘇って来た。
その身に刻まれた深い傷。

あのような事……、今度はもっと酷いことになるかもしれない。
なによりも、知り合いが、あの優しい目が、くすんでいく、歪んでいくのは、恐怖であった。

「だめっ、そんなの！」

「あのなあ」

サムは先程逃げ出した脇道に車を入れた。

「……湾岸大火災が起こったら、どうなると思う？」

「どうって……」

真美が思い浮かべたのは、炎の海に沈む街だったが、サムが言っているのはそういうことではなかった。

「……ジャパン政府は、この街を切り離すぞ」

もっと大きな、それは政治的な対処であった。

「湾岸部……水没指定の立ち入り禁止区域に一番多く住みついているのはホームレスだ。だが政府は、公式にはホームレスの存在なんて認めてない。けどな、そこに居る以上、火災が起きれば死傷者が出る。もしかすると、その中には市民権を持っている人間がいるかもしれない。となれば、見分けが付かない以上は、全ての負傷者を収容しなければならぬし、死者も回収しなければならない」

それがどれだけの作業となるのか。

どれほどの資金が必要な作戦となるのか。

搾取を受け入れるという屈辱に耐えてまで、日本は身売りをしたのである。

「そんな金、どこから出すっていうんだ。人道支援とか、災害対策とか、そんなものは金と余裕があるからできることだ。それがないジャパンって州は、この街をまるごと捨てるぞ。州都を移動して、あとは知らんぷりだ」

もつとも……と続ける。

「首相は、その状況を利用するかもしれないがな。湾岸部は土地の沈降と海面上昇で見放された封鎖区域がほとんどだ。そこで火災が起こったところで、死ぬのはホームレスが大半だ。再開発もやりや

すくなる。州都を移動した上で、真つ新に……」

「そんなつ、お父さんはそんなこと！」

「ホームレスを見捨てるような真似はしているのに？」

あまりにも痛烈だったかもしれないが、真美を黙らせるには十分な効果を持っていた。

「この州だけが、知事制度を取ってない理由がわかるか？」

唐突に話題を取り替える。

「責任を取らせるためさ」

「え？」

「首相はそのための首にすぎない。この州の政策について、決定は全て本国の議会で行われている。首相はただのお飾りだ」

「嘘……」

愕然とする。

選挙で選ばれた代表である……、と当然のように思っていたからだ。

（選挙？）

はっとした。

選挙権を持っているのは、誰なのかと考えて……。

想像をする。テレビで勝手な事を言っていた、評論家、批評家達……。

的外れな父への総括。

父は、それらに対し、軽く突っ込み、笑っていた。

だが裏を知ると笑えなかった。そんな父に対する批判や応援の中には、姿の见えない亡霊のような彼らの声は反映されていないのだから。

ぞわぞわとする。

父は、彼らの意見について肯定も否定もしていたが……『彼ら』とは誰のことだったのだろうか？

父は、ホームレスという存在を、勘定に入れた言葉を口にしていただろうか？

市民とホームレス。どちらの人口が多いのかはわからない。

だが選挙は『市民』だけで行われ、父は有権者に対する言葉だけを耳に入れていた。

それはどうしてなのだろう？

「同情はできるさ。本国が本当に欲しいのは橋頭堡^{きやうづつぽう}なんだ。米軍を駐屯させるための巨大な基地だよ。ジャパニーズなんてどうだって良い。もし本国の切り離し政策が行われたら、この州は本当に駄目になる。だから本国へと、税金という形で貢がなきゃならん。有益だと示さなきゃならないんだ。そのためにはホームレスなんて無一文の連中のことなんて考えてはいられんさ。想像して見る。明日からは君も、君の友人も、その周りの人間も、テレビの向こうの連中だって、みんな一斉にホームレスになる。そんな未来が来たらどうなると思う？」

一切の庇護を失うのだという。

「今までホームレスを毛嫌いしていた連中が、今度はホームレスになるんだよ。認められると思うか？ そんな風になることを。これまでぬくぬくと生きて来た連中が、そうなってしまったとして、これも現実なのだと認めて生きていくことができると思うか？」

そんな混乱を避けるためにはと説明する。

「現状を維持し続けることが最低限必要なんだよ。そのためにはホームレスのことなんて気にしてられんさ。お飾りはお飾りなりに頑張ってるってことだよ。良心を削って、本国に尻尾を振って、右と左、守れる方だけを選んで守ってる」

だからこそ、と。

「首相は、全てを台無しにする道は選ばない。選べない。この列島の三分の一を任されている人間として、その十分の一以下の面積を守るために、終始することなんてしない」

高潔だという。

「俺が知ってる君の父親はそういう人だ。もしそんな道を取れば、自分の首がどうなるかなんて考えるまでもない。それでもやる。き

つとな。けど」

顔をしかめる。

「見捨てられた連中がどうなるか……」

捨てられる街に取り残される人間がどうなってしまふのか。

「ホームレスは、君たちピープルを憎んでる。うらやんでる。もしそんなことになったりしたら、連中は、ここぞとばかりに狩りの獲物にするだろうな、新参者を。今まで自分たちのことを、よくも……ってな」

「……真美もだよ？」

美幸の押し殺した声に、真美は素直に頷いた。

「真美のパパの仕事が無くなっちゃったら」

「わかってる……」

真美と美幸は、お互い俯きながら視線を交わした。

もしそのようなことになったりすれば、真美はどちらの側にも居られなくなってしまうだろう。

虐げる政策を取ってきた人間の娘として……。

最悪の選択をした男の家族として……。

BULLET:9 (後書き)

何回書き直しても、会話が破綻してる気がする(、・・・) 大丈夫かな

BULLET:10

派手に銃声が鳴り響くのだが、もっぱら撃っているのはテロリストたちであった。

ジムはじつと潜んで、相手の出方を窺っていた。目を閉じて、静かに呼吸をくり返している。

早かった呼吸が落ちついていくにつれて、一度に吸い込む量が多くなっていく。

ふうふう……、と深く吐いて、ジムはようやくまぶたを開いた。地を蹴り駆け出し、銃声の元へとまっしぐらに押し迫る。

両腕で顔を庇う、脇と、腹に着弾を感じたが、それはよろけさせるほどのものでも無かった。

フルメタルジャケットでも無い限り、彼のコートが撃ち抜かれることはない。

それでも複数の射線が集まって、ジムの体をめった打ちにした。コートを通して響く衝撃に、スプenserによって刻まれた傷が疼き出す。

しかし、その傷のことを彼らは知らない。

ジムが手負いであることなど気付いても居ない。

むしろ、鬼気迫る様子が、彼らの恐怖心を強く煽った。

迫られる者にとって、恐怖そのものであったろう。

幾ら弾丸を撃ち込んでも、決して倒れない男など。

「あああああああ！」

票的にされた男が、ジムの突撃を体に受けて、一緒にたに転がった。

恐ろしさの余りそれでも引き金を引くのだが、カキンカキンと無情なノック音が響くだけであった。

逆光の中、ジムの瞳と振り上げられたナイフの刀身が、鋭く閃く。
(どうして!?)

男は弾を撃ち出してくれない銃に、裏切りへの呪詛を吐いて、死亡した。

プレハブの建物は事務所だろう、他にトラックとライトバン、ワゴンボックスカー、積み上げられた木材などが場所を閉めている。

「ジム！」

ジムはピラミッド状に積み上げられた木材の上で、うなだれていた。

自分の足を見つめたままで、顔を上げようもしない。

「ジム？」

真美と美幸は、不審なものを感じて足を緩めた。見上げるような位置で立ち止まり、ピクリともしないジムの顔を恐る恐る覗きこむ。「心配するな」

そんな二人の肩をポンと叩いて、サムは山を登った。

「モルヒネを使ったな？」

ジムの顔がゆっくりと上がる。

虚ろな瞳は、焦点が合っていないかった。

「……奴は逃げたのか？」

サムは囁くように問いかけた。

「スペンサーだよ」

その一言に、目に光が戻り出す。

「奴は……」

問いかける声にサムは頷いた。

「伊豆方向らしい、警察無線を拾った」

「海……」

「海軍が所属不明のタンカーを見付けた、もうすぐ東京湾に入る」
そこで一度、サムは話を途切れさせた。

「……大丈夫か？」

「大丈夫？」

どこか心を遊離させたまま、ジムはくつくつと笑い始めた。

「大丈夫？ ああ、大丈夫さ……」

「どこがだ」

呆れるサム、しかしジムは立ち上がる事で返事にした。

「おっと」

よろけたジムを咄嗟に支える。

「ふう……、いいか？ やつらはタンカーを東京港にぶつけて火の海にするつもりだ」

「火の海……」

「そうだ、二十年前の悪夢を自力で再現するつもりだ」

「二十……、二十年、二十年前？」

「そうだ」

その年こそ海面上昇によって、東京地盤の液化化が一度に押し進んだ年だった。

日本はそれまでの過剰な税政策とあいつぐ失敗に対するツケから抜け出せず、それでもなお海面上昇と地盤沈下に対して、それまでの様に迅速な処理などとは程遠い政治を展開していた。

調査委員会の設置から予算の捻出、地方への首都移転作業が始まる迄には実に五年もの時を無駄に費やし、その間、じりじりと進む水没を見過ごした。

東京から逃げ出す人々は増加の一途を辿った、が、首都圏に居住していた多くの他人に無関心な人種には、そうなくても頼るべきつてなどどこにもなかった。

地方もまた、そのような身勝手な人種を寛大に受け入れられるほど寛容では無かった。

軋轢からの混乱が巻き起こり、衝突は大きな破壊を招いた。略奪などが日常化したのである。

もちろんこれを收拾する努力は地方自治体に委任され、国はなんの手出しもしなかった。

結果的に株価の暴落などと相まって、経済復興支援と言う名目で

介入した米国を主体とする多国籍軍が、分割統治を行う運びとなったのである。

こうして二十年前に、米国第五十一州ジャパンが誕生する運びとなったのである。

「覚えてるだろう？ 五才だったお前はあの街でなにをしていた？」
地盤沈下による高層ビルの倒壊、汚染物の流出による病気の蔓延。捨てられた犬や猫が、置き去りにされた老人や子供を食い殺していた。

そして太った犬猫、ネズミを人がむさぼり食らっていた。
スラム化していく街には、逃げ出す市民とは逆に、行き場を失った者達が流入した。

この街の秩序が彼らを『ホームレス』として切り捨てる事で回復するまでに、実に二十年もの歳月をかけてきたわけである。

切り捨てていなければ、保証の名の元に莫大な予算を割くこととなり、共に破綻していた事だろう。

サムは思う。

（しかし結局は、どこかで無理が浮き彫りになるんだ）

その被害者の一人がここに居るし、自分の娘も、今の娘もそうだった。

「スペンサーは……」

どこにいいのかと、ジムの鋭い目が問いかける。

「……タンカーと合流するつもりだろうな」

「海上保安部は？」

「最悪の場合にはタンカーに大穴を開けて、海を火事にしても止めるつもりだ」

「わかった」

言葉を重ねることに、口調がはつきりしていく。

サムはもう一度だけ確認をした。

「大丈夫なのか？」

「……モルヒネと一緒にブドウ糖と栄養剤を打った、少し飛んでた

みたいだな」

「無茶をする、その内ショック死するぞ？」

「かまうもんか」

ジムはサムを押しつけて、自分の足で跳び下りた。

「くっ……」

無理をして真っ直ぐに立ち、目眩いを感じて前へとよろける。それを慌てて支えたのは美幸だった。

「……美幸？」

涙目のまま、ギョツと唇を噛んで足元を見ている。

「すまない……」

そっぴうんだったら……。

謝るくらいなら……。

もうやめてって言っても……。

美幸の口腔に、様々な言葉がぐつと詰まった。

一度に溢れ過ぎて、どれも口にする事が出来なかった。

（え？）

ふつとジムの体重が軽くなって美幸は驚いた。

「真美？」

反対側の肩を、真美が持ち上げていた。

脇の下に肩を入れて、男一人を支える二人。

美幸は真美の気難しそうな横顔を見つめた。

「……まだ、お礼してないもの」

真美は呻いた。

「助けて貰ったの……、二度目だから、だから」

真美は言う。

「今度……、デートでもなんでもしてあげるから」

俯いた真美の頭を、くしゃつと撫でる手があった、ジムだ。

肩を借りながら、それでも腕を曲げて、彼女の頭に乗せていた。

美幸に向けるような、またあの晩に真美に見せたような、そんな目をしていた。

「行くぞ」

そんな三人をサムが促した。

「いったん街に戻る。二人の保護を警察に頼んだら軍のヘリだ」

「軍の？」

「ボス戦だ……、出し惜しみしてる場合じゃないだろう？」

「そうだな」

支えを潰さないように歩き出すジムに苦笑を見せる。

「……ムツキが無茶してなきゃいいが」

サムの独り言が耳に入った。

BULLET: 11

「降ろせって言うてるだろ、なんで遠ざかるんだよ！」

窓にべったりと張り付いて、ムツキは降下していくヘリに歯ぎしりをした。

巨大なオイルタンカーが、速度を落として、ヘリを迎え入れようとしている。

デッキにはまばらに人影が見えた。どれも銃を持っている。

深緑色の海は、真上からでは平坦に見えて、スケール感を狂わせる。

「降りろってんだよ！ でなきゃ跳び下りるぞ！！」

「やってくださいよ、勝手に！」

ヘリの着艦に合わせて、タンカーが速力を上げ始めた。

「あれにどうやって降りろってんですか！？」

パイロットが悲鳴を上げる。

「向こうのヘリはちゃんと降りただろうが！」

「じゃあなんであっちのに乗らなかつたんです！」

「ヘリ飛ばすだけでも税金使ってた！ 犯人捕まえなきゃ、なに言われるかわかんねえだろ！」

ムツキは怒鳴りながらも、座席の下や背もたれの後ろを漁るように、がさごそとやり始めた。

「ちっ、何もないのかよ、このヘリ……」

見つかるものと言えば、予備のショットガン程度である。

「ナパームぐらいつんどけよ」

げっそりとする。

「警察のヘリになに期待してるんです」

「ライフルとショットガン、それに予備の弾……。お、催涙弾あるじゃねえか」

やたらと大きな弾を見つける。

「マスクと、防弾チョッキもあるな？」

「ええ」

「お前も着ろ」

「ええっ!？」

勘の良いパイロットは嫌な予感に襲われた。

「突入する気ですか!？」

「ヘリを下ろすだけでいい、船内ハッチに取りつくまで盾になってくれ」

「嫌ですって!」

「早くしろ!」

チョッキを着込んだムツキは、強引に操縦桿を奪い取った。

代わりにチョッキを押し付ける。

「レバーは俺が持つてやる!」

「もう!」

その場の勢いと言うものかもしれない。パイロットの彼は、本当にレバーを預けてチョッキに腕を通した。

マジックテープだ、体の前面で重ね合わせるように止める。

すぐさま操縦桿を取り返し、深呼吸一つで下方にあるタンカーを見据えた。

「いいですか! タッチアンドゴーで行きますよ!」

「わかった!」

「行きます!」

レバーを押し込む、ヘリは急降下爆撃機のような勢いで突っ込んだ。

「ひゃーっほあ! 騎兵隊ってこんな感じだよな!」

「知りませんよ!」

何処か楽しそうな返事に苦笑する。

(結構ノってんじゃないか!)

ギリギリの機首が引き揚げられる。ゴンという震動は、パイプが何かに足の当たった音だろう。

「グッドラック！」

「幸運がありやあ、こんな国に生まれてねえよ！」

ニヤリと笑って、ムツキは跳び下りた。三メートルほどの落下で、着地の際に足が痺れたが、そののんびりとはしていられなかった。

チュンと、真近くて銃弾が跳ねたからである。

それを皮切りに、集中砲火がムツキを襲う。

「くそ！」

駆けながら、隠れられそうな場所を探す。五メートルほど先にタラップがあった。

警察のヘリの外装甲は、基本的に防弾使用となっていた。が、ガラスはそうはいかない。

撃たれてひび割れが走ったように、防弾効果は薄いのだ。

所詮はヘリである。装甲車のように盾となれる堅さはない。

それでもムツキのために、敵を追い散らそうと、滞空してくれていた。

（無理しやがって！）

「おおおおっ！」

恐怖からつい声が出てしまう、ムツキは身を低くして駆け抜けた。右手にライフル、左手には催涙弾の詰まったごつい銃、ショットガンは肩にかけている。

フル装備だった。

「早いつて！」

ヘリが上昇して逃げにかかった。善意で残ってくれていたとはいえ、やはり文句は出てしまう。

タラップの後ろにハッチがあった。しかも開け放たれていたので、ムツキは迷わず飛び込んだ。

「ていつ！」

シュポン、シュコンと間抜けな音を立てて催涙弾が転がっていく。簡易マスクとゴーグルのセットを着けて、突入する。白い煙の中、船員たちがうめき声を上げて転がっていた。

「そこだ！」

ムツキは何の躊躇もなくライフルを撃った。ゴーグルのために視界は悪いが、通路は広くない。

避けようもなく、肩や足に銃弾を受けて、赤き陽の昇る国の構成員は転がった。

これがただの船員であつたなら？　ムツキはそんな事を考えてかぶりを振った。

奴らは銃を持っていた、と。

「さてと」

換気の都合で、ガスの薄れは早かった。

もう視界は晴れ出している。

「……こういう時、大將はブリッジに居るもんだって、相場は決まってるんだよな」

ムツキの計画はずさんであつた。

「で、ブリッジってどう行くんだ？」

BULLET: 12

「行っちゃったね……」

「うん……」

警察署の屋上、ヘリポート。

吹き付ける風に飛ばされないよう、二人は足を踏ん張り髪とスライトを押さえていた。

見送ったヘリは、あっという間に小さくなってしまった。その中には父と兄が居る。両方とも、自分がそう思っているだけの赤の人だ。

だからこそ、美幸の心中は複雑だった。

「止めなくて、よかったの？」

真美に尋ねられ、美幸はくつと顎を引いた。

「だって……」

こみあげてくる何かを堪えるような美幸の背に、真美はそつと手のひらを当てた。

その温もりのせいなのか？ 美幸の目からは涙がこぼれた。

美幸……、加奈子が母、美佐子と共に連れて来られたのは立派な家だった。

立派というのもおかしいかもしれないが、この時世に庭付きの一戸建を持っていると言うのは異常であつたのだ。

ただ資産家だというだけでは、そのような土地を持つ許可が下りることはない。

加奈子は美佐子に手を繋がれたまま、虚ろな瞳で建物を見上げていた。

まるで、自分には無関係な世界を見ている目であつた。
扉に立つ黒人が、低い声を漏らす。

「入りなさい」

ビクリと……。

繋がっている手から、母の脅えを感じ取り、加奈子は母を見上げた。

自分がどんな経緯で生まれたものなのか知っている。

なぜ父親がいなかったのかも知っている。

けれども、母が自分を捨てないで居た理由も知っていた。

捨てる、見捨てる、それができなかったただけなのだと。

どうしたのだろう、どうなったのだろう、どんな風に思われたのだろう。

憎まれたのだろう。恨まれたのだろう……と。

いや、そうではなく、もし生きていて、憎まれているのだとしたら？。

恨んでいて、いつか目の前に現れ出したらと……。

そうやって、怯えなければなくなる影が増えてしまうことが怖かったただだろうと、わかっていた。

当の加奈子は、恨む、憎むという概念すら持てないほど、情動というものを知らなかった。

だから、泣きも笑いもしない子だった。

そんな加奈子は、ただ首をかしげるだけだった。

やがて男に促され、母に引かれて建物の扉をくぐるようになった。その扉をくぐるのが、どのような意味を持つのか、このときの加奈子に興味はなかった。

「その日から……、あたしは美幸に、パパの子になったの」

真美は美幸の話から、一つだけ疑問点を見付けていた。

「ね……、美幸の……、お母さんはどうしたの？」

美幸は顔をわずかに背けた。

「……本国で、働いてる」

「そう……」

（生きてるんだ）

それだけの事実があれば十分だと真美はほっと胸を撫で下ろした。

「よかった……」

「何が？」

「何がって」

真美は戸惑った。

「だって……、電話とか、手紙とか、話ぐらいできるし、会おうと思えば」

「そんな事できるわけないじゃない」

美幸は吐き捨てた。

笑いながら。

「あたしがどうしてジムのこと嫌ってたと思う？ ホームレスだって馬鹿にしたと思うの？ ニセモノの『美幸』だってわからないように、普通の女の子に見せ掛けようとしてたんだよ？ あたしもホームレスなのについて思いながら。 ごめんなさいって思いながら！！」

「美幸……」

真美は泣きそうな表情を作った。

親友の慟哭の受け止め方が分からなかったから。

ぼたぼたと……、床の上に染みが生まれる。

ややあつて……、ぐしつと美幸が腕で涙を拭い取った。

「ごめん……、あたし、先に帰るね？」

暖かい陽射しの中、凍えるような寒気を堪えて背を向ける。

拒絶が背中に張り付いている。

「待つて、美幸！」

「やだ！」

美幸は伸ばされた手を払いのけた。

「美幸……」

どうして？ とその手を包むように抱きしめる真美。

手を弾かれたことにはない、彼女のどうしては……。

（お願い……、こっち向いてよお）

美幸が顔を逸らせている事にかかっている。

「ごめん……」

美幸はそれだけをくり返した。

「恐いの」

「恐いつて……」

ゆっくりと……、美幸の顔が上がって来る。

真美は変わってしまった親友の目に愕然とした。

「……あたし、ホームレスなもの」

美幸の目はただ脅えていた。

だが同時に真美は悟っていた。

明るさもはしゃぎようも、何もかもが裏返しで、この美幸こそが

本当の『加奈子』なのだ。

ホームレスは陰気で、暗くて、卑屈だから。

だから美幸という、明るくて強気な子を演じていたのだ。

だが。

「美幸は美幸じゃない！」

顔を被って隠そうとする美幸の腕を強引に取り、真美はその両腕

を広げさせた。

「やめて！」

「だめ！ あたしを見て、美幸！」

「違うつ、あたし美幸じゃない！」

声が辛さの余り裏返る。

「美幸のふりをしてただけっ、加奈子なの！」

思いを吐き出す、隠していた感情を。

母はきつと辛かったのだ。

見捨てることができなくて、だが育て続けるのも苦しくて。

娘の成長に意味を見いだせず、負担に苦しみを覚えるだけで。

愛するどころか、憎むという感情すらわかず、邪魔だという認識

だけが肥大化して。

そんな自分が、人間として辛くて、嫌になって行つて……。

母は、加奈子のように、生まれつきのホームレスではなく、国家解体以前に生まれた、家を、家族を失つてなつたホームレスだから。

あの日、サムの家の扉をくぐることに、加奈子はどんな意味があるのかわからなかった。

だが今は、美幸は、母に切り捨てられたのだと言うことを悟っていた。

重荷をなくした母親は、ジャパンという州が生まれる以前の、日本という国があつた頃に近い、幸せな世界を生きているはずだった。だけど……。

「あたしは……、美幸じゃないい……」

「美幸い……」

泣き出した美幸と、泣きそうな真美。

真美はそれでも一回り小さくなつた美幸を抱きしめた。

「美幸は……、嫌いじゃないよね？ あたしのこと、嫌いじゃないよね？」

「真美い……」

縋るように泣きつく。

お互い泣き出して、わけがわからなくなり始めていた。

それでも共通していたのは、お互いに嫌われたくないと言う想いだけだった。

それが今までの自分達の間係を、否定してしまう事だと直感的に悟っていたから。

真実よりも大事なものを、二人は抱き合う事で確認していた。

BULLET: 13

風を切り裂く音が聞こえる。

州軍の輸送ヘリである。ジムとサムは、横向けに並べられた席に差し向かいで腰掛けていた。

今、ジムは、焼き合わせていた傷口を、釣り糸で縫い補強していた。

その上、速乾性の接着剤で固めようとしていた。

サムのように教育を受けてきた人間にとっては、異常としか映らない行為であったが、逆にジムのように雑学すら知らないものにとつては、接着剤はくつつくものだという認識でしかない。人体に有害な物質を含んでいることすらわからない。

サムは、そんなジムのことを、ぼんやりと眺めているだけだった。注意などしない。彼は別のことを考えていた。

（こいつは……、殺された美幸を見付けた時に、自分一人で抱え込んでくれた。遺体を片付けて、生きてるように見せ掛けて……。でなければ、俺がそう偽装しなければならぬ所だったんだ）

溜め息を吐く、相当に重苦しい息だった。

本物の美幸が狙われたのは、FBIへの見せしめのためであった。州となったジャパンであるが、警察機構などは警視庁という組織がそのまま移行されていた。

組織、人員がそのまま、である。

このため、官僚制や、エリート信仰の排泄のために、FBIが投入され、汚物の洗い出しが行われた。

その中に、サムという捜査官も交わっていた。

（腐った連中が、俺の家族を、美幸を襲わせた。ジムが吹き飛ばしたのは、その親玉だった）

ジムが爆破した家に住んでいたのは、美幸の誘拐を指示した男であった。

日本人の警察官であつた。

（だがなあジム……、その家族、子供まで、巻き込む必要があつたのか？）

それを問いかけることは出来ない。その様な汚らしい真似をする大人に育てられた子供たちが、ホームレスに対して何をしているかを考えれば、軽々しいことは言えなかつた。

寄る辺をもたず、守る力もないホームレスは、子供にとつても良いオモチャなのだ。

倫理や道徳に沿つたふるまいをする必要はない。どこまでも残酷にいたぶれる。

彼らは法的には存在していないのだから、傷つけたところで殺したところで、罪に問われることはない。

爆弾を背負わされることになった子供が、そのように残酷な子供ではなかつたと、あるいは将来、そのようにならなかつたという保障が、いったいどこにあつたというのか。

子は親を見て、親を真似て育つものだから、親がろくでなしなら、それを模倣する子供が、まともな人格を備えているわけがない。

ろくでもない生き方は、気楽で、無軌道で、無責任に、面白おかしく過ごせるのだから。

（しかし、それは想像だ。実際にどうなるかは本人次第だ）

たとえば加奈子である。

地盤沈下と浸水によって傾いたビル群。廃墟にはあちこちに死体が転がっていた。

枯れ木のように細くなつて餓死したもの、汚物と吐瀉物にまみれた病死したもの、あるいは人の手によって命を絶ちきられたもの。

それらが当たり前前に転がっているような、すさんだ環境の中で、加奈子は幼少期を過ごして来た。

物心つく前から、目の前で母親が犯される様を見て来ていた。それはお金や食べ物のためであつたり、あるいは男たちの憂さ晴らしであつたり、ただの遊びであつたりもした。

同意の場合があれば、暴行、恐喝、強姦といった時もあった。

加奈子、彼女は、生きるとは母のような状態なのだと悟っていた。思い違いをしていた。

比較するものがなければ、教えてくれるものも居なかったからである。

しかし加奈子は、美幸となつて、そのような状態からは脱却している。

どうなるかはわからない。という見本であつた。

その一方で、ホームレスは、公的に認められておらず、法で保護されることは無い。

だから彼らには、彼ら自身によって、ルールと自衛策を生み出したのだ。

そんな中に、ジムという獵犬や、スペンサーと呼ばれるテロリストの姿があつた。

サムにはどちらが悪いとも言えないし、言う資格も、権利も無かつた。

守れるものが有限ならば、自分たちにとって得になるものだけを取捨選択する。

そうしたのは、彼の生まれた国であり、彼はその手先として、この州へと渡つてきたのだから。

（みせしめか……）

美幸が殺されたのも、ジムが殺した子供も、その意味合いでは同じであつた。

（そして奴らの脅しは失敗した。美幸……代わりの美幸、俺が加奈子を代役として据えたことで、奴らの計画は失敗したことになったからだ。奴らは面子を潰されることになった。だがその結果、別の子が狙われるようなことになった）

何度も要人の子供は狙われていた。

真美が特別に狙われたわけではなかったのである。

（誰かが後を断ち切らない限り、同じことのくり返しになる）

ちらりと見る、黙々と自分の体を縫い付けるジムの姿を。

その体には、無数の青痣が生まれ始めていた。銃弾で『叩かれた』痕だった。

しかしその土台は、切られたような、引つかかれたような、あるいは撃ち抜かれたような傷が、無数に刻まれていた。

本来なら、そのようなものは、覚悟を持ってその職に就いた人間、すなわち自身が負うべきものでは無かっただろうか？

（誰かがやるべきことを、ホームレス同士で……俺は）

新しく手に入れた娘を殺されないために？

（許される事じゃないかもしれない。だがどうしろって言うんだ？

タンカーは進んでる。何千何百と死ぬことになるかもしれない。

相手はそんな真似ができる連中だ。放っておくわけにはいかない。

奴らは自分たちと同じはずのホームレスを巻き添えにすることもためらわない。むしろ、殺してやるのが救いだと思ってる）

「何笑ってるんだ？」

怪訝そうなジムこの声に、サムはふっと力を抜いた。

「なに……、いまさら良心の呵責も無いもんだなと思ってる？」

「あ？」

「奴らはなにに対して……なにが欲しくて頑張ってるんだろうなあ」

市民権じゃないのか？ と、ジムはサムから視線を外して、コー

トを身につけた。

「十年だ」

ジムは漏らした。

「組織のトップを掴むまでに七年、あれから三年……、ようやく組織を潰せるところまで来た。これで終わろう」

「ああ……、そう、だな」

おかしいもので、実際に手を染める男が、傍観者を選んだ男を慰めている。

（それだけ、俺は甘いつて事だ……）

地獄を見ていないから、こんな風に考えられる。

誰よりもジムの凶行を止めたいと思いながらも、サムは資格の有無で悩んでいた。

だが例え理由がどうであれ、殺し合いは悲しむべき行為である。それを嘆いてしまう神経が当たり前ではないのだとすれば、人の命を奪える精神こそが正しいのだろうか？

何かから逃れるために足掻いている人間が居る。

それを抑え付けるために鞭を振るう人間が居る。

それを止めるために銃を持つ者がいて。

さらなる悲劇を消すために奪う者がいた。

何処までもエスカレートするしか無いのだとすれば、誰かが何処かで諦めるしかないのだろうか？

負の連鎖、というものを断ち切るために、我慢をするしかないのだろうか？

殺したいほどの激情を堪えてまで。

それをやったのがサムであった。

最初に、余裕のあるものが、足掻いている人間を受け入れてやればすむ話なのだ。

加奈子と美佐子を受け入れたサムの様に。

例えその余裕がないにしても、いたぶっても良いのだというルールはない。

だが狂ったルールこそが、この国には見えない法として存在している。

この国で生まれたわけではないからかも知れないが、サムにはその見えないものが理解できないでいた。

だから一概に、それら暗黙の了解ごとに沿って行動しているジムのことを、批難できないでいた。

理詰めで諭せないからだ。

自分と彼らは、違う世界で生きている。

違う法律、法則、同じ言葉を話していても、言葉の意味が、重さが、軽さが違っている。

それでは、なにも伝わらない。伝えることができない。

「見えたぞ」

ジムの言葉にはつとして、サムは意識を切り替えた。

「あれか」

ジムの側の窓からタンカーを見下ろす。

「さすが軍のヘリだよ、余裕のある内に追い付いてくれた」

そう言ってからジムは、真横にあるサムの目を覗きこんだ。

「良かったのか？」

「なんだ？」

「軍まで動員して……、これであんたは」

サムはククツと笑った。

「これで俺もこれだろうけどな？」

首を掻き切るゼスチャーをする。

「お前だけに危ない橋を渡らせておけるか」

「だけどあんたには……」

「あいつは本国に送り返すさ」

妻のことを言うが、自分と美幸　加奈子については、口にできなかった。

美幸とは別人である加奈子を、本国へと入国させることは難しかった。

だからと言って、一人だけこの州に置き去りにすることもできないとなれば、父として、サムとして、側に残ることを選ぶしかない。

その程度には、サムは、父親のつもりだった。

サムはその場を離れて、パイロットの席へと向かった。

「彼が降りるまでの間の援護射撃、できるか！？」

ヘルメット越しの耳にも届くように大声を張り上げる。

「実弾じゃ無理ですよ、タンカーでしょ！？」

「脅しにブリッジを狙えば良い。ジム、走れるな？」

ジムは頷くと、サムの車から盗み出して来た武器の確認を始めた。脇のホルスターに一丁、腰のガンベルトにももう一つ大きな口径のマグナムを用意している。

足元の箱から予備のマガジンをしこたまベルトに差し込み、ポケットにも入れた。

「どれだけ持つてく気だ」

「持てるだけだ」

最後に背中側のホルスターのコンバットナイフび感触を確かめる。コートの前を合わせて閉めた。

「ライフルはいらないのか？」

「船内じゃ使い道が無い……、それに二種類も三種類も弾を持つてくわけにはいかないだろ」

「そうだな、援護はするが、当てにしないでくれよ？」
にかつと笑い、サムは手で合図を送った。

「行くぞ！」

ムツキが乗っていたヘリ以上の速度で一気に降下する、それはパイロットの熟練度の差だ。

「統制が取れてない」

船上の混乱が見て取れた。

ヘリは一端、船を追尾する形で海面すれすれに滞空する。

「ムツキが暴れてるんだろ。魚雷をぶち込んで援護してやろう」

サムはにたりと笑うと携帯型のバズに目をやった、シートの下に押し込まれているそれは、バズーカというには中途半端に大きい代物だ。

ジムは頷くと引つ張り出して肩に担いだ。

サムが注意する。

「スクリューは破壊するなよ？ バラスト用のタンクに穴を空けるんだ、それから強行着艦だ」

「……随分と思い切ってるな？」

「ああ、どうせこれが最後だからな」

手を差し出す、ジムは面食らったが、その手を握り返した。

「やってやれ！」

「ああ！」

お互い突き押すように手を放す。

後部ハッチが開かれる。輸送機がわずかな間だけオイルタンカーの左舷をやや前に出る。

サムが真後ろに立ってないのを確認して、ジムは片膝を立ててバズを構え、引き金を引いた。

シュコンと軽い音を立てたものが、そのままちゃぽんと着水する。白い航跡を残して小さなものが海面の下を走っていった。

BULLET: 14

バラスト部分の外壁が爆圧に歪む。

歪みは影響の範囲を広げて、ついには裂けるように割れた。船に走る震動に、船員は慌てふためいた。

その様子はヘリの上からでも良く見える。

「降りる！」

上昇しようとした分、速力が落ち、少しばかり船に先行される。

その分を埋め直すように加速して、ヘリは船の後部へと強引に距離を詰めた。

ジムはロープを掴むと、十分な降下を待たずに飛び降りた。

「無茶しやがって！」

慌てて、サムは、敵とおぼしき人影に向かって乱射した。

足元のロープは悲鳴を上げている。

ほとんど自由落下と変わらない勢いでジムは降り立った。ロープを掴むために手の緩衝材としていた袖口が、余りの摩擦に煙を噴いていた。

「くっ！」

膝を使っても消し切れない衝撃を、転がる事で適当に逃がす。

そうしてジムは、物陰を探して走り込み、地下のタンク室への階段へと飛び込んでいった。

ムツキの読みでは操舵室に居るはずのスペンサーであったが、実際には食堂に居た。

それは彼らがプロでは無かったからである。

ホームレスと言う横繋がりの集団であって、一枚岩の組織ではない。

その団体ごとに、ピラミッド構造を作っていた。

今回は、それらが協力して、一つの作戦を成そうとしていたのである。

皮肉なのは、ジムによる爆殺事件が、そんな組織構造の構築に一役買ってしまったことだった。

実質的なリーダーを失い、彼らはそれぞれに分裂した。分裂した中で、台頭するものが現れ、連絡を取り合い、そしてこのようなコミュニティを再編成するに至ったのである。

彼らは、社会に不満を持つ人間の寄り集まりであるだけに、誰の指示に従っているわけでも無い。

ただ、集団における、力関係が在るだけであつた。

「くっ」

食器や調理器具が突然の震動にガチャガチャと揺れた。

たむろっていたスペンサー達は、器具の襲撃から身を守りつつ、踏ん張った。

「ジムか!？」

まだ続く横揺れと揺り返しに、スペンサーが叫ぶ。

「警官は!？」

「まだうるついでやがる」

「さつさと片付けろ、ジムが来る!」

荒々しくソーセージをかじりながら、タンカーの最終航路を割り出しにかかる。

広げられている地図を、スペンサーと、もう一人が覗き込んだ。

「本当にぶつけるのか？」

「ああ……、この騒ぎで役所の記録はまた混乱する。なんとか市民として、記録の再登録を受けるんだ」

「でもどうやって? 証明は……」

「死んだ奴を騙ってもいいし、なんでもいい。組織はもうダメだから……、金は市民権を取った奴で分ければいい」

逃走用の金は他の街に確保してあつた。

問題は市民権という名前の、個人証明である。

湾岸火災のような大混乱が起これば、多数の死傷者、行方不明が発生する。

彼らは他人を騙って、身元を保証する証明書を手に入れるつもりであった。

「……わかった、上手くいったらあんたを居候させてやるよ」

「ぬかすなよ？ 俺は俺で市民権を取るさ」

スペンサーはポンと軽く男の胸を叩いた。

「じゃあ警官を追い払って来る」

「ああ、頼んだぞ、ケンヂ」

スペンサーは見送ってから、他の仲間を呼び寄せた。

「弾が足りないってんだよ！」

船内の扉は動かせばそれだけで盾になる。

浸水時には気密用のハッチとして使用するのだから当然だろう。

おかげで撃ち合いも膠着状態に入っていた。

既に催涙弾は切らしていた。ショットガンも弾切れになって放り出している。

銃を抜く、が、ライフルを持つ敵と比べ、あまりにも貧弱な武装であった。

「官給品なんだけどなあ」

苦笑いを浮かべて、二十一世紀以前から親しまれているリボルバーガンを両手で握る。

（今度マグナム当たり請求してみるか）

「このっ！」

ムツキは半身を見せて引き金を引こうとした、しかし不意に走った震動によるめかされた。

「なんだ！？ っと！」

ムツキは意識が外れかけるのを強引に戻した。

不意の激震にもまれて、扉の影から人影が転がり出す。

「もらい！」

素早く一人一発、合計四発をムツキは放ち、ふうっと銃口の煙を吹いた。

「……やるじゃん。俺って、うわ！」

だが船の傾きは、ムツキとはなんの関わりもない。

揺れはより一層酷くなり、どんどんと安定性を失わせて行つた。

もちろん、バラストタンクの一つに穴が空いたぐらいで沈むほど、現代のタンカーは柔では無い。

タンクの内部は幾つかに分け隔てられている。

ではどうしてこれ程までに状況が酷くなるのか？

答えは簡単で、大きく空いた横穴が、船の速力によって流れ込む塩水に引っかかり、ブレーキのような役割を果たしてしまつていたからである。

船体はやがて歪みを生じ、よじれは亀裂を広げていく。

もちろん、速力を落とせば問題のない状態である。しかし彼らは限りなく素人に近く、とにかく船を前に進ませようと奮闘していた。「ブリッジ、船が傾いてるぞ、どうした！」

舌打ちをする。

「ジムか……、あいつ」

「どうするんだスペンサー？」

無線機を握り締めたまま、歯ぎしりをするスペンサーに問いかける。

ややあって、スペンサーはしぼり出すように答えを出した。

「……ブリッジへ行く」

「警官もうつろついでるんだぞ？」

「ジムは俺が殺る」

仲間の静止を無視してハンドガンのスライドを引く。

そしてジムがしたのと同じように、銃口を額に押し付けた。

「……ケリを人任せにしたのが間違いだった。あいつで狂ったんだ、なにもかも！」

スペンサーはコートを羽織った。

ジムと同じデザインの、薄汚れた白いコートを。

「なんで今更なんだよ……ジム」

「なんつだこりゃ？」

ブリッジに辿り着いたムツキが見たのは、弾丸によって穴だらけになっているブリッジであった。

死体と血に彩られている。窓枠のフレームは派手に歪んでいた。

「機関銃でも叩き込まれたのか？」

まさにその通りであった、サムの乗っていた軍用ヘリの仕業である。

「おい……、ちょっと待てよ？」

良く見れば操舵輪が転がっている。

ムツキは一気に青ざめた。

「この船、どうなってるんだよ!？」

制御装置が火花を上げている。

慌ててひしゃげ、穴が開き、歪んでいる機器を乗り越えていく。

「スピード、落ちてる？」

景色の流れは遅くなっている。

タンカーともなれば、そのほとんどの管理をコンピューターが代行している。

その入力デバイスに異状が発生した場合、幾つかの緊急回避装置が働き出す。

この場合の対策は『機関停止』であった。それは救命ボートを降ろせるようにするための措置であり、つまりは最悪の状態を示していた。

「しかし、誰が？」

突如、間近くで銃弾が跳ねた。

「っ!?!」

ムツキはとつさに身を伏せた。

「ジム!」

（誰だ!?!）

ムツキは隠れながらも毒づいた。

頭を出そうにもそれも出来ない。

「決着を付けてやる!」

（人違いだよ!）

機械の影から出た途端に殺される。そんな確信があつて、ムツキは相手の姿を確認しなかった。

相手が狙いを定めているのは分かり切っていたからだ。

（やっぱおまわりさんとしては、間違いつてもんを教えてやんないとな……）

心の中で冗談を言つて溜め息を吐く。

「おゝい、俺は……」

ジムじゃない、と言い返そうとして、できなくなった。

運悪くそこへサムのヘリが舞い戻つて来たからだ。

おかげでローターの音に、声がかき消されてしまった。

「なんでこんな時に!?!」

「出て来い、ジムっ!?!」

（違つてえのに!）

頭を抱えて丸くなる。頭上、隠れている操作盤の上で銃弾が跳ね飛んだ。

「どうした? 俺を殺しに来たんだろう? 出てこいよ!」

返事が無い事と、ヘリの出現に確信を抱いて、スペンサーは勢いを増した。

勘違いも深まった。

（くそっ!）

頭は下げたままで、銃だけを出して威嚇を放つ。

効果はあった、スペンサーは威嚇かどうかの判断もつかないままに、慌てる様に物陰に潜んだ。

間と静寂が生まれた、割れた窓から吹き込んで来る風の音が轟々と響く。

それこそがムツキの望んだ物で、彼はほっと一息を吐いた。

「……あれほど嫌がってたお前が、今や殺し屋とはな？」

（何の話だ？）

憎むような声に、ムツキは話しかけるタイミングを失ってしまった。

かなり感情的になっっているよう感じられる。

（野郎の知り合いか？）

押し殺しているものに興味を覚えて、ムツキはぐっと言いつ返しと言葉を飲み込んだ。

勝手にしゃべらせることにする。

「……覚えているか？ コンビニ強盗をやった時のことを。そうだよ。俺がボスに見込まれるようになった、あれだよ！ あの時、やつぱりお前も連れて行けば良かったんだ、そうすりゃ！」

重々しい銃声が三度続いた。

ムツキの隠れている台がその衝撃に響いた。

（ばかやろう！）

弾が貫通して来なかった事に感謝する。

「お前は今でも、親友だった！」

（泣いてやがるのか！？）

泣き声とは程遠い怨嗟の声であったのだが、ムツキは不思議とそれが『泣き言』であることに気がついてしまった。

慟哭。

そんな表現が思い浮かんだ。

BULLET: 15

「緊急停止装置が働いたのか……」

不規則に襲いかかってきていた荷重が弱くなっていた。

「あの警官、どこ行っただんだ」

彼はスペンサーと話していた男であった。

短髪の下顔はいかめしい、右眉の中心に縦に走る傷痕が特徴的だった。

銃を手に呼吸を整え、ひとつひとつの角を曲がる度に、律儀に構え直している。

彼が辿っているのは死体であった。転々と転がっている。死体があるのなら、殺した人間が居るはずである。

つまりはこの先に、侵入者がいるはずであった。

スペンサーの出した指示によって、退船作業が始まっている。

生かしては置けないが、放って置いても、船と共に沈むか、船と共に火だるまになるかしてくれるだろう。そう考えると、この手で……というこだわりも、意味がないように思えてきていた。

彼は、ついさっきまで、旧東京湾岸部の壊滅に伴う混乱を前提にして行動していた。その混乱に乗じての上陸作戦があったからだ。

だが緊急停止装置が働いたとなると、ブリッジが押さえられてしまった可能性があった。クルーが無事なら、装置を止めているはずだからだ。

となれば、船が港まで辿り着けるかどうかは、微妙なところである。

タンカーには、最低でも水没している住宅街まで入り込んでもらわなければならない。

そうでなければ陸地にまで炎が届かないからである。

彼はベルトに下げていた通信機を取った。

「おい、誰か下に居るのか？」

ザツとノイズがあつて、声が返つて来た。

『……こちら階段前です』

「いいか、下に行つてバルブを開ける」

『えっ、原油のですか？』

「そうだ、このままじゃ水没区までは届かないからな。湾内炎上に切り換える」

『……わかりました』

通信を切つて放り捨てる。後はなるようになると言わんばかりの投げやりな態度だった。

「ま、運が良けりや、水上警備隊やらで死人が出るだろ」

それがテレビで報道されればもうけものだった。

行方不明者として名前が出れば、記録をたどり、家族を見つけ、処理して入れ替われば良いからである。

（さてと……）

男は自分が何処へ向かうべきかを思案した。

後ろポケットをまさぐる。ペンにしては太い棒が入っている。

それは携帯型の酸素ボンベだった。口に咥えて使用するタイプのものである。

海に潜つての上陸用に用意していたものだった。

だがこのままでは、どうやら本来の用途には程遠い用い方をする羽目になるようだ、彼はため息をこぼした。

炎上する海面下を移動し、脱出するためには、どれほど泳がねばならないのかと考えて、少しばかり鬱になったのである。

「ね？」

「なに？」

男達が命がけで戦っている頃、真美と美幸は警察署内の自動販売機が並ぶ禁煙スペースに陣取っていた。

湾岸部の慌ただしさが波及して、署内はどこも殺気立っていた。

そのために居場所が見つからず、隅に追いやられた格好となっていた。

申しわけ程度にすえつけられているシートは、すっかりくたびれていてお尻が痛くなる代物だった。

真美は、ジュースを飲む？ いらない。と言うそっけない答えに一瞬逃げかけたものの、思い直して、思い切って美幸に尋ねた。

「美幸は、ジムのこと、好きなの？」

美幸はうるたえるように泡を食った。

だが真美の真剣な瞳を見て、やがて観念したように頬を染めて頷いた。

「そっか……」

真美は満足した様に微笑んだ。

「やっぱりねえ、そうだと思った」

だが美幸は、告白とは逆に沈痛な表情を作った。

「でも……」

「でも？」

「あたし……、ジムに酷い事ばかり言ってるから……」

クスツと真美は失笑した。

「正体がばれないようにって？」

「うん……」

「それはジムだって分かってくれてるじゃない」

「そう……、かな？」

美幸の縋るような目に真美は頷いた。

「そうだよ、だって、美幸を見るジムの目って……、すごく優しいもん」

美幸はハツとした後で、何を思い出したのか、赤くなった。

「う……、ん」

その様子をにたにたと見やる真美である。

ますます美幸は赤くなり、小さくなった。

「……ジム、優しい目で見てくれるの」

「そうなんだよねえ」

「真美？」

突然不機嫌になった真美に怪訝な目を向ける。真美はブスツくれた後に、はあっと大きく俯いた。

「やっぱりかあ」

「やっぱりって？」

やがて行き着いた答えに自分で驚く。

「まさか、真美も！？」

「違う違う」

真美はパタパタと手を振った。

「だ、だって真美、お礼にデートとか、あ~~~~！？」

「だから違うってばあ」

だがその目は泳いで、美幸を見ない。

「なんで目を逸らすの？ こっち見て！」

（面白い……）

真美はしばし美幸で遊ぶ事に決めた。

「ジム、守ってくれた時に、すつごく優しい目で見つめてくれたのよねえ？」

「じいむう~~~~」

うつうつと悔しげに唸りを上げる、そんな美幸に吹き出した。

「冗談よ、冗談」

「もう！」

美幸はそっぽを向いて、跳びかかりそうになっていた腰を落ち着けた。

それから顔を向けないままに話し出す。

「……ジムが」

「なに？」

しばしの間。

「……市民になったら、あたし、お嫁さんになるの」
「はあ！？」

いきなり飛躍した会話に真美はぶっ飛んだ。

「な、なにそれ!？」

「だって、元ホームレスだなんて……、知られるわけにはいかないでしょ？」

どちらにとつても……それは悲壮な言葉だが、何処か嬉しそうなのは気のせいだろうか？

「それって立場利用してない？」

そこには一種の駆け引きが存在していた。

平静を装い、ホームレスだと当たり前前に口にしてみせた美幸と……。

それに気がつき、間を空けずに、いつものように振る舞ってみせた真美。

それは、いつもの、いままでの二人で居られるかどうかの確認だった。試験で、試練であった。が、それはそれとして……。

「だから真美、ジムとのデートは無しにしてね？」

「それはそれ、これはこれ」

「真美い！」

「べーっだ」

友情と男の話は、別物であるらしかった。

BULLET:16

安定性を失うということは、揺れが大きくなるということだ。

波による縦揺れに加えて、本来ならあり得るはずのない横揺れまでも発生していた。

船はもう、波間に漂い、惰性だけで前に進んでいる状態であった。転覆の可能性と出てきている……というのに、スペンサーはそんな状況であっても、己の憎しみを優先させていた。

「俺達は雑な計画を立てて、コンビ二を襲った。あの時、お前は怒ってたよな？」

（知らねえっての……）

ムツキは毒づく。

相手を勘違いしたまま、スペンサーは独白する。

それは至極簡単なコンビ二強盗であるはずだった。スペンサーが警報装置を鳴らそうとする動きに気がつき、店員を撃った。

そこから、おかしくなったのだ。

「ははっ、見るよ、食いもんだ、ジュースもある！」

HOPE!

スペンサーはあのレンガの壁の前で、戦利品をぶちまけた。

「どうだよ、ジム！」

ジムは、そんなスペンサーの胸ぐらをつかんで、叫んだのだ。

「何で撃った！」

「なんだよ、怒ってるのか？」

「殺しはしないって言ったじゃないか！」

「しょうがないだろ、銃を取ろうとしゃがったんだ」

「嘘だ！ 警報装置を押そうとしただけだ。十分逃げられたのに、なんで！」

「バカ言っつなよ！？」

つかみかからんとする腕を跳ねのける。

『いいか！ 非常線でも張られたら俺達に逃げる方法なんてないんだぞ！？』

『捕まっちゃって、暫く檻の中に入れられるだけだ！』

『そんな事じゃ、いつまでたっても上には登れないんだよ！』

『上ってなんだよ！？』

『市民権さ！』

スペンサーは嬉々として目を輝かせた。

あるいは爛々と目を血走らせた。

『仕事を頼まれたんだ。上手くいけば組織に入れてもらえるんだ！』

『組織ってまさか！？』

『そうさ！ もうこんな事も最後にできる、だからいま捕まるわけにはいかないんだよ！』

ジムの中に葛藤が生まれる。

『な？ だから手伝ってくれよ！』

組織、それはサムの、FBIの追っているターゲットであった。

そしてジムが長年潜ることで繋がりを探し求めて来た存在でもある。

組織に認められるということは、『上の存在』、すなわち最も知リたかった情報、『正体』を明るみにできると言うことでもあった。だから。

（でも！）

ジムの頭には、スペンサーの銃によって倒れた青年のことがこびりついていた。

『俺はいかないからな！』

『ジム！？』

『人殺しになるよりは、ドブねずみの方がマシだ！』

現実のスペンサーが泣き叫んだ。

『俺は待ってたんだぞっ、お前のことを！』

だがその仕事こそが悲劇のはじまりであったのだ。スペンサーは知らないままだった。

自分が任された仕事のことを。
幼女誘拐と殺害、死体遺棄。
それがジムに何を意味したのか？ 彼は知らないままでいた。

（そうだ思い出せ）

ジムは原油タンクのチェックルームを制圧していた。
足元に転がっているのは船員なのか組織の構成員なのか？
今の彼には、それは些細な問題であった。

（……思い出せ、あの時の）

ジムは脳裏に、心が砕けた時の光景を、ひとつひとつ掘り起こすようにして思い浮かべていった。

抱きしめれば、ぶじゅりと壊れた、腐った体。

目や鼻、耳から、汚水が垂れ出して……。

這い出るように、皮膚の下から虫が沸いていた。

その体を抱きしめて、頬擦りしながら、涙を流した。

鼻から口から、だらしなく鼻水と涎を流して号泣した。

蠅が鼻の中に飛び込んで来ても気にならなかった。

その少女は、体の中を食われているのだから。

許せなかった。

その命は、自分のような者をも、等しく愛してくれた希有な存在であったのだと。

喜びを与えてくれる、温もりの源。

それを守れなかったということが。

止めることができたのに。

ヒーローのように、そのときに、その場に居合わせるチャンスが
ありながら……。

スペンサーという、まさに当事者となる者が目の前に居たという
のに。

（そうだ、美幸のためなんかじゃない……）

心を黒く塗り潰していく。

（俺はヒーローなんかじゃない……）

正義の味方であったなら、あの時、スペンサーから話を聞いた時に、その被害者となるもののことを考えられたはずであった。

守るために、あえて味方のふりをすることも考えられたはずであった。

自分の感情は切り捨てて。

だが現実としては、自分の感情だけを吐き捨てて、ジムは目を背けてしまった。

これ以上、関わり合いにはなりたくない、嫌な気持ちを抱えたくない、自分可愛さに去ってしまった。

逃げ出したのだ。

振り返っていれば、きっと、美幸が狙われているとわかって、助けられたはずだったのにと、ジムは今でも、助けてくれてありがとう、彼女を華麗に守りきり、助ける想像をして、自己嫌悪に陥っていた。

だから、美幸のことは、きっと自業自得なのだと思う。

そんな自分だから、助けることができなかったのだと。

守ることができなかったのだと。

それはこんな自分とは、無縁に生きるはずだった少女だった。

あれはこんな自分が思うことなど、不遜と思える可憐な子だった。

それを奪ったのが、自分の生まれ育った世界だというのなら、ぶち壊してやりたいと、破滅を願って、なにが悪いというのだろうか？

こんな自分もろとも、自分を生んだ世界も、あの子が生きていくはずだった綺麗な世界だけを残して、消え去ってしまえば良いのだと。

消し去って、なにが悪いのだと、それだけを望むのだ。

（それが俺だ！）

ちらりと、こんな自分を悲しむ少女の顔が思い浮かんだが、それさえも心の闇に飲み込んでしまった。

（これは俺の憂さ晴らしで、だから！）

この一連の思考作業は、少女の、美幸の顔が、記憶から薄れかける度にくり返して来た儀式であった。

ジムは煮えたぎるような自己への批判と、それとは真逆にあたる無力感を同時に抱いて、顔を上げた。

原油流出事故対策用のオイル硬化剤を、タンクに入れるよう操作する。

量は足りないだろうが、可燃性は確実に減るし、海上保安部の消化作業も、何割かは手間が減るだろう。気休め以上の効果があるはずだった。

（これでいい……）

最後にジムは、コントロールパネルを撃ち抜いて、さらにコンピュータとの接続配線の詰まったメンテナンス用のハッチを開けた。

（ここを潰せば……）

時限式の爆薬を放り込む。

これであちらの世界は守られる。

あとはこちらの世界を清掃し……。

「ジム！」

背後からの殺気立った声にハツとする。

「ケンヂ！」

咄嗟に後頭部を袖口で庇うと、まさにそこへと衝撃が叩き込まれた。

ゴオオオオン……。

響くような震動は爆発である。

進行方向に向かって右から左へ突き抜けるような、それが船自身の発したものの、外部からの攻撃によるものかはわからない。

（ちくしょう！）

ムツキは焦燥感から駆け出した。

現状の維持に飽きたからでもあった。

我慢が足りない男だった。

「お前！」

手短な通路へ駆け逃げる後ろ姿に、スペンサーの驚き混じりの声がかけられた。

「ジムじゃないのか！？」

「誰が返事したんだよ！」

「くそっ！」

「だっ！」

「恥ずかしい真似させやがって！」

「青春ありがとよ！」

銃声に頭を抱えるムツキ、その後を追うように着弾が生まれる。反対側のハッチへ逃げ込んだムツキにスペンサーは毒づいた。

「飼犬が！」

彼はムツキの消えたハッチに手を掛け、狙いも定めずに撃ち込んだ。

しかし一瞬早く、ムツキは横道へと飛び込んでいる。

「せめて警察犬と言ってくれ！」

壁にもたれるようにして、シリンダーから空薬莖を排泄する。

ポケットをまさぐり、一発ずつ装弾していく、マガジンを交換すればよい銃に比べて、圧倒的に不利な瞬間だった。

焦りで指先が震えてしまう。

それをごまかすように、彼は角の向こうにいるスペンサーに話しかけた。

「市民権が手に入ったら、尻尾振ることになるのはそっちだろうが！　ちよつとは遠慮したらどうなんだ！」

返礼は丁寧な銃声だった。

「リードを付けられるもんならやってみろ！」

スペンサーは、大腿に、無造作に歩いて追い立てる。

真っ直ぐに伸ばした腕の先に、横向きに握った銃を撃ちながら。

（野郎、ぶち切れてやがる……）
ムツキは吹き出す冷や汗を肩で拭った。

BULLET: 17

二十世紀末に、一つの大きな紛争が勃発していた。

それは独立を求める宗教的な意味合いが、多分に含まれている紛争であった。

彼らの独立を認めることはできなかった。なぜならそれに続こうとする動きが見られたからである。

少数の独立が、宗教的な意味合いをもって、一つの集団を形成する流れへと転じる時、大帝國が復活する。

そんな最悪のシナリオが進行する中に彼は居た。

とある日系企業の工場であった。

彼の背後には、先日まで工場で働いていた現地人が居る。

正面には銃を持った男が三人、軍人であった。

「奴らを渡せ」

「奴らに俺の祖父は殺された」

「死にたくなかったらそこをどけ」

彼らは日本人は腰抜けだと判断していた。

しかしその日本人は違っていた。

「殺すなら殺せ。だが覚えておけ。お前が彼らを許さぬように、わたしの家族はお前を決して許さない。そしてお前が彼らの部族全てを憎むように、わたしの一族はお前達全てを憎むようになるだろう」

憤怒の形相で足を踏み出し、彼は男達を気圧した。

「引き金を引くが良い。だがそれはより大きな、新たな憎しみを生み出す引き金だ。その最初の引き金を引くが良いっ！ この国の何百年も続くいさかいと同じものを、生み出す覚悟があるのなら！」

彼の恫喝は、男達を動揺させた。

「わたしの家族、一族、そして日本人全てはお前を、お前達を、お前達一族を、部族を、そしてこの国そのものを、一人残らず殺すまで、決して許しはしないだろう！」

この叫びを工場内に響かせた男こそ、ケンヂと言う男の祖父であった。

「くっ！」

袖口に着弾した弾は、少なくとも腕を痺れさせた。衝撃で銃を取り落としてしまう。

短く舌打ちをし、ジムは身を屈めた地を蹴った。

前に飛んで、一回転し、身を捻りながら立ち上がる。

そのワンアクションの最中に、ナイフを逆手に抜いていた。

「ジムが！」

ケンヂは、身構えたジムに、銃口を向けた。発砲、しかしジムは、その射軸の下に潜り込んで、ケンヂの懐へと入り込んだ。

隙をさらしてしまったケンヂは、死に近いものを感じたが、ジムは、わざとその隙を見逃して、脇をすり抜けるように部屋の外へと駆け抜けた。

「逃げる気か!？」

怒声を上げるケンヂ、だが背後からの衝撃と爆音が、彼の声をかき消した。

世界が白と黒と轟音とで混ざり合う。

「がっ！」

わけの分からない状態で、とにかくケンヂはどこかの、なにかに叩きつけられた。

「ちく、しょう！」

頭を振りながら起き上がる。

「ケンヂ！」

さっきの返礼とばかりに、ジムが戸口から狙いを定めていた。それを確認し、ケンヂは起き上がる途中の、中腰のままで目を細めた。

口を開く。

「……驚いたぜ、お前が犬だったとはな」
「そうか？」

お互い、声を低く、緊張でぴりぴりしたものを言葉に孕んでいた。
「FBIに飼い馴らされたか？ お前は騙されてるんだよ」

「なにをだ？」

ジムは銃口を動かして先を促した。

ケンヂは説得を続ける。

「そんな真似を続けても、市民になれるわけないだろうが。殺人依存症として処理されるだけだぞ」

それは正にその通りだろう。

だから返答は……、口元に浮かべた冷笑だった。

「だから、どうしたんだよ？」

やけに抑揚のない声だった。

「な、に？」

啞然とするケンヂ。

ジムの冷徹な瞳には、暗いものだけが見て取れた。

「……なぜ殺した？」

今のジムにはそれだけだった。

「答える！ なぜ美幸をなぶった！」

その名前にハツとする。

「美幸っ、そうか、FBIの……」

合点がいったように、ケンヂは目に残忍さを湛えた。

彼にとっても、組織に取り入るための、最初の大仕事だった。

その被害者の名前は、忘れられるものではない。

「何を怒ってやがる……」

同時に、納得のいかないものが、彼の身の内を駆け巡っていた。

「俺たちをゴミ扱いしてる連中のガキじゃねエか！」

「そんな事は関係無い！」

悲鳴のような声だった。

「美幸は、ただ殺されていなかった！」

「お前だつて吹き飛ばしただろうが！」

「手首と手足の腱が切られてたっ」

「俺たちを人間にしてくれる人だった！」

「顔は恐怖に固まっていた！」

「笑顔を奪つたのは、お前もだろう！」

ブーツに隠していたナイフを投擲するケンヂ。

ジムはそれを左手に持ったナイフで弾き飛ばした。

引き金を引き反撃するジム。

バスバスとケンヂの左肩から胸に当たる、なのにケンヂは倒れない。

「防弾チョッキがお前だけの特権だと思うなよ！」

意に介さずにナイフで銃を切り上げる。

「ちっ！」

銃が転がった。

「はっ、はっ！ ナイフなら俺の方が上だからな！」

ジムは痺れが残っているのを承知で、右手に持ち変えた。

ケンヂが見せる、ボクサーのような軽快なステップがジムの幻惑する。が、ジムは対照的に足を止めて、ナイフの先を固定した。

力をため込むように腰を引く。

ジムが口を開く。

「……そういえば、お前もだ、と言ったよな？」

「ああ？」

「……許せなかったんだよ」

「あ？」

一瞬気が抜けたように、ケンヂは止まった。

「人の幸せを奪って、のうのうと子育てやってる野郎がな！」

「なっ！？」

ケンヂのナイフが刺さる事も気にせずに、ジムは懷に踏み込んだ。ずぶりと左腕に刃先がめり込んでいく、コートは防弾であっても防刃ではない。

ナイフを防ぐことはできない。

「!？」

ケンヂは慌ててナイフを抜こうとしたが、深く肉にめり込んだナイフは抜けなかった。

左腕を犠牲にしてナイフを封じ、ジムはケンヂの胸に深々と刃を突き立てた。

ごりつと、あばら骨を削った嫌な感触が手のひらに響く。

「かつ、はっ……」

ケンヂの口から、気管を逆流した血が込み上げた。

「安心してくれ」

ジムは倒れかかって来るケンヂを肩で受け止め、口にした。

「俺も行くのは、そっちだ」

凄惨な笑みを唇に湛えて、ジムはケンヂの体を流して倒した。

BULLET: 18

（嘘だろ！？）

カン、カン、カン……と、転がって来た物体に、ムツキは思い切り目を丸くした。

慌てて背を向け駆け逃げる。手短な横道に飛び込んだ瞬間、背後で小さめの爆発が起きた。

走ってきた道を、爆圧が真っ直ぐに駆け抜けていく。

「……正気じゃねえな」

安堵の息をつく。

船内で平然と手榴弾を使うのだから、錯乱していると見るのも仕方無いことだろう。

客船ではない、タンカーなのだ。

通路のそこら中には、何を通しているのかわからないパイプが走っている。

「死ぬつもりか？ あいつ」

舌打ちをする。しかし現実には違っていた、スペンサーにはまだ計算するだけの余裕があった。

（この船はもうだめだ）

手榴弾を転がした後、スペンサーは素早く逃げにかかっていた。

心の何処かには、ジムのことが引つ掛かっていたが、それでも逃走を第一に考えていた。

それは長年にわたって染み付いた、ホームレスとしての習性に基づく行動であった。

長年培って来たものが、どこかで最悪の状況を回避するために警告を発していた。

「非常用ポート……、いや、上はヘリで押さえられてるのか、なら甲板への通路に出るため階段を下りる。」

しかし下りた瞬間、彼の頭からは冷静な思考が消え失せた。

「ジイイイイイム！」

自分とは逆に、上がって来た人影に、スペンサーは銃を向けて引き金を引いた。

しかし響いたのは、カキンという無情な音だけであった。弾は既に尽きていた。

若い少女が必死に抗っていた。

ホームレスの溜まり場からも外れている、朽ちかけた廃ビルの中だった。

暗いフロアーを、生のコンクリートの上を、埃の上に這った跡を残して、両手足の筋を断たれた少女が、肘で、膝で、腹で、逃げ惑っていた。

まるで芋虫のようだった。

ひっと小さな悲鳴が上がった。

少女は、男に蹴り転がされて、上向きにされた。

少女の着ていたものは無残に裂けていた。

かなり乱暴に裂いたのだろう、お腹にナイフの切っ先が残した傷がある。

血は埃をこねて固まっていた。

顔は涙と、鼻水と、涎でぐしゃぐしゃに彩られていた。

その下にあるのは紛れもなく恐怖である。

少女の腰の辺りに水たまりが広がっていった。

だがその様な憂き目に会っても、少女のむちつとした肌はどこか女の子を感じさせた。

その健康さが、余計な嗜虐心までも掻き立てた。

男は自分の腕を見た。

枯れ木のようだった。

この少女は恵まれている。

少女の腕は、男よりも肉があった。たるみがあった。

それだけで、男はいくらでも残忍になれた。

何も知らずに、何も分からずに、何も考えずに、自分達を蔑む。それがこの子だ。

彼女は、彼女の親は、その知り合いは、彼らを保護している者達に。

自分たちへと目を向けさせるために、見て見ぬ振りをさせないために、追わせるために、無視できない痛みや傷を与えるために。

自分達の苦しみを訴える生贄として、その少女を捧げさせた、捧げさせてやった。

ただそれだけの事だったと言うのに。

「スペンサー！」

ジムの銃が唸るも、それはスペンサーの勢いを削ぐには迫力が足りなかった。

階段を飛んだスペンサーは、肩に一発受けたものの、それだけでジムに押し迫る事に成功した。

弾は彼の身には食い込まなかった。彼のコートは、ジムと揃いで作られた特注品であったからだ。

「くっ！」

白刃が煌めく。ジムはその刃をかるうじてナイフで受け止めた。

ジムは間近くで見たスペンサーの表情に啞然とした。

「お前？」

「なんで、なんでだよ！」

スペンサーは泣きじゃくっていた。

「俺達は兄弟だって誓ったじゃないか！」

泣き喚き、それでも攻撃自体は苛烈を極めた。

ジムの腕を、喉を、胸を、急所を確実に狙って、刃はコートを切り裂いた。

「俺と来い、ジム！」

行動とは裏腹な言葉を彼はかけた。

「今からでも一緒に、市民に、なあ！」

優しい言葉を口にしながらも、スペンサーのひるがえすような一撃が、ジムの左頬を斬り裂いた。

ジムは一端下がった。そしてコートの袖で流れ出る血を拭いさつた。

息が多少上がっている。だがスペンサーはそれ以上に、息も絶え絶えになっていた。

それでもやめようとしないのだ。

「市民になりたくて、俺を殺すってんだろ？　そういう仕事なんだから！？　だったら！」

「……スペンサー」

ジムは哀れみを含んだ目でスペンサーを見つめた。
ゆっくりと、わかってないとかぶりを振った。

「違う、違うよ……」

ジムは、これまで誰にも見せなかった笑みを見せた。

「……もう、そんなことはどうでもいいんだ」

空虚な表情。だが瞳だけは、見せたことのあるものだった。

それは真美や美幸に見せた、優しさを湛える瞳であった。

その目に映るのは、スペンサーに重なる腐れた『美幸』の姿であった。

両腕を広げ、微笑んでいる『美幸』がそこに居た。

まるでジムが来てくれるのを待っていたように、微笑んで。

あるいはやつと来てくれたのかと、笑っているようにさえ見える顔をしていた。

それを天使と見紛えてしまうのは、ジムの心が歪んでいるためだろう。

「……俺は、こんな俺にも好きって言葉をくれた美幸が、忘れられないだけなんだ」

ジムはその幻影に対して笑みを返していた。

たまらなくなったのはスペンサーだった。

「いつかは裏切られるっ、そうに決まっていた！」

「それならそれでよかった。でもお前が奪ったんだっ！ そんな未来も！」

生きる意味をと、ジムは息を止めて、跳びつくようにナイフを繰り出した。

だがスペンサーはケンヂ程には甘くなかった。

「はっ！」

ジムの左腕を狙い突き刺す、さらには身を捻ってナイフをかわし、揚げ句には肘で首を押さえつけるようにして、ジムの体を壁に押し付けた。

「このまま首を掻き切ってやる！」

それに対するジムの返答は銃声だった。

「がっ！」

スペンサーの左足がぐんと曲がる。

スペンサーが、ジムの腕に突き刺したナイフを引き抜いている間に、ジムは彼の腿に銃口を押し当てていたのだ。

「スペンサー！」

ジムは吠えて蹴り飛ばした。左手に握った銃も、右手に閃くナイフも忘れて、顔面を蹴り潰すために足を抜くように振り切っていた。

「くはっ！」

彼の鼻がねじ曲がった。

「うおおおおおおお！」

「ひっ！」

獣同然のジムの姿が、スペンサーにジムという存在を忘れさせた。恐怖が、そこに居る者が、知り合いではなく、死に神なのだと錯覚をさせた。

そうして、ジムというフィルターを失って、スペンサーはようやく何かを悟ることができたのだった。

（死ぬ？ この俺が、なんで？）

悟ったものは、自分が抱えていた物が、幻想に過ぎなかったという現実であった。

彼が、親友と思っていた者が、自分と同じ生き物で、自分と同じものを欲していて、自分と同じ目線で世界を見ている、仲間であるという錯覚であった。

（殺したからか？ 壊したからなのか？）

自分が壊したものはなんだっただろうかと想像をする。

スペンサーは、あの少女の顔を思い浮かべた。

（あいつの夢、希望？）

スペンサーもまた、市民になった自分を思い浮かべて、氣力を奮い起こしてきた。

生きる活力、目標を持っていた。

でなければ、あつというまにくたびれて、うずくまってしまう。

二度と立ち上がれなくなってしまう。

だが、そんな自分にとつての氣力の元が市民権なら、ジムにとつてのそれは、一体何であつたのだろうか？

（俺たちが、あの子を、殺したからか？）

夢や希望の象徴はそれぞれだ。

レンガの壁の前で誓った約束。

『幸せになつてやろうぜ』

二人が描いた夢の形。

幸せな世界。

自分たちは同じものを見ていなかった。

その時、違う世界を夢見ていた。

想像をして、思い浮かべていたのだと、スペンサーはここに来てようやく悟った。

自分が見ていたのは、不安のない生活と怠惰な日常で。

ジムが見ていたものは、美幸という姿をしていた。

約束をした。

幸せになると。

幸せな世界へ行くと。

幸せな世界の住人になると。

だがその世界に不幸を振りまいた。
不運をまき散らし、世界を壊した。
穢すようなことをしたのは。

（俺！？）

「かつ！」

スペンサーは咄嗟に目についた階段を転がり落ちた。

「待て！」

それを追ってジムもまた深部へと潜り戻っていく。

全身の打ち身を堪える無様な背中だけを、ジムは目に留めて追っ
ていった。

BULLET: 19

人気が感じられなくなっていた。

ムツキは身の安全など考えず、無造作に歩を進めていた。

「……残ってるのは死体だけか」

転がっていたものをつま先でつつく。

自分が転がした連中だった。

ムツキは、侵入経路を逆にたどって、表へ出ようとしていた。

不安定な揺れに、壁に手を突く。

「つてことはだ……」

そのまま動かず、考えをまとめる。

目指すべき場所を思案する。

行きに倒した連中の内、息を残していた者たちがいなくなっていた。

新手の人影もない。

ともに脱出したのだろう。

「逃げやがったか」

歯ざしりをする。

「……海上保安部の方で、網張ってるんだろっなあ？」

独り言が多くなっているのは、不安な証拠であった。

上の足並みが揃わず、動きが遅いからこそ、ムツキは勝手に突撃したのだ。

警戒網が張られていたとしても、網の目はざるのようなものだと想像できた。

『じむう！』

少女が丘を駆けていく。

『自分』とは違い過ぎる容姿、金色の髪はつややかで、ポチャッと

した肉付きに、健康的な足がキュロットスカートから伸びていた。
いつかの日に手を伸ばそうとして……そして避けられたことが思
い浮かぶ。

だから、ジムは臆病にも、自分から彼女に触らない。

なのに、その少女は、そんなジムの逡巡など知ることもなく、と
ても無邪気に抱きついて、純粹無垢な笑みを向ける。

『じむう、ゆきい……』

ジムの匂うコートにも嫌な顔一つせず、彼女はその中に入り込ん
で隠れてしまった。

顔だけを出して、白い息を吐き、空を見上げ、途中にあるジムの
瞳にえへらと返す。

ジムは、そんな表情がたまらなく好きだった。

自然と瞳に、あの優しいものが浮かんてしまう。

守るべき価値あるものがここにある。

いつか、この少女も変わるのだろう。

皆と同じように、自分を蔑むようになるのだろう。

そう想像することは侮辱であろう。

この無垢さが、永遠のものであると信じられるほど、ジムは純粹
ではなく、すれ違っていた。

だが、それがどうだというのだろうか、ジムは考える。

ジムという存在は、その名前ですらも架空のもので、人から避け
られ、逃げられ、追われ、毛嫌いされるようなモノであることは、
真実なのだから。

だから、綺麗なままで居て欲しいと思う。

自分は外套がいうとなって、守るからと。

寒さも痛さも悲しみからも。

庇うからと。

いつの日か、この子も、自身で身に纏うものを選ぶのだろう。

自分は捨てられ、換えられてしまうのだろう。

もっと綺麗で、すてきなものに目を向けるだろう。

そしてその身を包んでもらい、幸せそうに笑うのだろうと。
そこにはもう、自分の居場所はないだろうけど、せめてその時までと。

その時まででいいからと、願わずには居られなかった。

コートの内側にこもる彼女の温もりを、少しでも蓄えるよう前を合わせて。

天を仰いで、雪を受けた。

だが、彼は守れなかった。

ガスに膨らんだ体を抱きしめて号泣した。

純真だった少女は犯され穢され壊れてしまった。

ジムは謝り続けていた。

自分が望んでしまったためにと。

自分がまわりついたためにと。

だから彼女は穢れてしまったのだ。

このように無残な姿をさらす羽目になったのだと。

祟られてしまったのだと、泣き叫んだ。

「あああああああああ！」

ジムは雄叫びを上げて後を追った。

望んではいけなかったのだと、心を凍てつかせた瞬間だった。

自分が殺したのだと、己を呪った。

仕返しとばかりに、何の罪もない子供の鞆に爆弾を忍ばせた時には、もう復讐心を抑えられなくなっていた。

無差別にその対象を求めて足掻いた、心の乾きを癒すために。

潜入捜査のことなど気にもとめなくなっていた。

彼女をそうしてしまった人間の仲間の振りなど、どのような理由があれでなかった。

心の中で燃えたぎった暗い炎は、ジムの優しさを燃やし尽くした。
だから今あるジムの姿は、ある意味とても自然なものだった。

「くはっ！」

スペンサーは駆け寄って来たジムの蹴りを両腕で受け止めた。

「ス、ペ、ン、サー！」

「や、やめ……」

「美幸は泣いたかつ、俺を呼んだか！」

立ち上がったスペンサーにナイフを振り回して斬りかかる。

「助けてくれと泣いたのか！？」

「ひい！」

スペンサーは、咄嗟にナイフで受け止めた。

キン、ゴイっと、金属の擦れ合う異音が響く。

それはジムのもつとも知りたかった事だった。

夢に何度も見て来たのだ。

何かを叫ぶ彼女の姿が。

「美幸は何を叫んだんだ！」

這いつくばり、手を伸ばし、何かを口にする彼女が見える。

だが顔がよくわからないのだ。

その背後で、彼女のことをあざ笑う男たちはよく見えるのに。

黒いコートは悪魔の翼。

ジムのコートが翻る。

まるで死神のように、スペンサーに見せる。

スペンサーは、恐怖に引きつりながらも思い返していた、あの少女は泣いていたかと。

答えは否だ。

口は塞いでいたし、塞いでいたテープを剥がしたのは喉を潰す時

になってからだった。

焼けつく液体に声を失った少女は、必死の形相で喘ぐように口を

パクパクとさせていただけだった。

あの口は、なんと叫んでいたのだろうか？

名前をくり返していたのだろうか？

誰の名を呼んでいたのか？

その唇の動きと、目の前の男の名が合致する。

（ジム？）

だがそれは、余りにも遅過ぎる認識であつた。

「うあつ！」

スペンサーはナイフを突き出し、手元のスイッチを押した。
柄から離れ、刃先が飛ぶ。

仕込みナイフはジムの顔を狙つたが、ジムは首を捻るだけで躲して見せた。

しかしスペンサーには、そこに生まれたわずかな時間で十分だつた。

身をひるがえして駆け出したのだ。

逃げ出した。

「くっ……」

追いかけようとしたジムであつたが、目に止まつた転がっている死体に、ここが何処だかを思い出した。

「原油……、タンクのコントロールルームの側か」

死んでいるのはケンヂであつた。

スペンサーの駆け込んだと思われる部屋の戸口の横に立つ。

やはりコントロールルームだつた。ジムの仕掛けた爆薬によってズタズタになってしまっている。

「スペンサー」

「ジム」

呼び掛けに答えた声はしつかりとしている。

ジムはナイフをぶら下げるように持つて姿を晒した。

スペンサーの目には正気が戻っていた。

「……俺達の何が違つてたのか、ようやくわかつたよ」

「そうか」

「俺は市民権という現実を」

スペンサーは銃を抜いた、それはジムがケンヂの襲撃で取り落とした銃だつた。

「お前はあのガキつて夢を……」

ジムは腕を真っ直ぐに伸ばし、ナイフの切っ先を据えた。

「だが市民って言葉こそが夢で、お前の甘えが現実だったんだ！」
発砲する。

弾丸はジムの眉間を狙っていた。
ジムは踏み込み、こめかみにかすれるほどの至近で避け、さらに
もう一步を跳ね飛んだ。

ナイフがスペンサーの喉元へ向かって放たれる。

一瞬の交錯、先によるめいたのはジムであったが、倒れたのはス
ペンサーだった。

「かつ……」

ひゅうと喉から息が吹き出され、スペンサーの体は崩れ落ちた。
びくびくとけいれんしながら、スペンサーは喉を押さえ、悶えて
いた。

血が手の隙間から溢れだし、転がるスペンサーと床を赤く塗り広
げていく。

だがそれも、やがて大きないれんを一、二度して、止まった。
ぱたりと手が落ち、動かなくなった。

「バカが……」

ジムはこめかみを押さえてかぶりを振っていた。
弾丸がかすめたために、めまいがしていたからだ。

だが脳震頭は簡単に晴れてくれない、ジムはへたり込むように座
り込んだ。

「はぁ……」

張り詰めていたものが抜け、緊張感を失うと同時に忘れていた疲
労感に襲われた。

「当てるよな……」

血も流し過ぎているのだろう、めまいは酷くなる一方だ。
視界もかすれてきている。

左の袖が、どす黒く染まっていた。

来る前に塞いだ傷など、とうの昔に開いていた。
ズズズ……、と、低い響きが聞こえる。

「……なんだ？」

スペンサーの、銃を握っていたのと逆の手には……。

真美の時に使用したような、リモコンが一つ握られていた。

ジムはおかしくなって、ゲラゲラと笑い出した。

自分の終わりが来たのだと、こんな終わり方かと、腹を抱えて転がり、笑った。

BULLET: 20

サムのヘリと、前世紀の政治家張りの遅さで駆けつけた海上保安部の巡視艇は、手を出しあぐねて、タンカーを見守っていた。

巨大な船が、黒煙を上げながら、慣性に任せてふらふらと漂っている。

その大きさは圧倒的で、土手っ腹の穴の問題もあって、蛇行もしている。

巡視艇やボートでは、下手に近づけば踏みつぶされて沈没させられかねなかった。

「ちくしょう！」

吐き捨てる。

爆発があちこちから起こっている。

「一度に爆発しなかったただけマシだが……、いや、逃げるために、わざと火を点けたのか」

タンカーの内部では、タンク内に仕掛けられていたタイマー式の爆発物が、次々と爆発していた。

発火程度の目的で仕掛けられた弱いものだったが、タンカーを炎上させるには十分な威力を放っていた。

サムは絶望的な現実から、なるべく楽観的な視点を拾い上げようと努力した。

ジムとムツキの顔が過る、ムツキはどうにかして逃げ出すかもしれない、だがジムは……。

「嫌な予感が当たったか……」

いや、予感じゃないかと首を振る。

ジムが、赤き陽の昇る国の構成員を殺し始めた時から。

一般人も巻き添えにするやり方に目覚めた時から。

もう、戻るべきところをなくした人間になっていたのだから。

「わかってたのに、くそ！」

なのに自分は、それでも彼のやり方を改めさせなかった。
それどころか容認していた。

（俺だって共犯じゃないか……）

苦いものを噛み締める。

美幸の仇を討ちたくて押し付けていた。

例えジムが、そのために市民になれなくなろうとも、
それが本音だ。

（あいつがその覚悟だって知ってて、俺は！）

改めて、隠していた汚い考えを追認する。

結局、手を汚さないように済むように、奴に押し付けていただけ
なのだ。

それは余りにも遅過ぎる悔恨だった。

（……お前が許さないのは、美幸を殺されたからじゃないんだな）
吐息をつく。

ジムという少年を拐^{かどわ}かした際の記憶が思い浮かんだ。
立派な家の前だった。あれは誰の家だっただろうか？

そこから見えた、大きな犬と戯れている少女がいた。

ジムが手を伸ばそうとして、少女は見知らぬ者たちに怯えて逃げ
てしまった。

それを悔しがる様子はなかった。

仕方のないことだというあきらめが窺えた。

だから、美幸という、手に入れたかったものを失ったことから、
奪った者への狂気へと走ったのかとサムは思っていた。

（だが、それは間違いだっただのか？ お前はなにが許せないんだ）
サムが抱いていたのは、美幸を殺されたことにたいする恨みであ
った。

だからサムの怒りは、美幸を殺すよう指示した男が死亡したこと
で、一応の決着を迎えていた。

しかしジムは違う。

今だに終わってはいないのはなぜか。

なぜにそれも死に急ぐのか？

ジムが、自分のせいで美幸が死んだ、呪われて死ぬことになった、などと思っているとは、気づけるはずもない。

ジムと美幸が仲良くじゃれ合っていたのを、許していたのはサムである。

そのサムの目から見て、美幸がジムを恨むようなことはない、断言できる。

だからサムには、ジムが、美幸が自分を恨んでいると思っている、とは考えられない。

火だるまになりつつあるタンカーを眺める。

「どうすれば、お前を止められるんだ……」

サムは、せめてそれを探す時間をくれと、ジムが生きて戻る事を切に願った。

「うっ！」

炎にあぶられ、ジムはよろめき、壁に手を突いた。

（お前らと同じところへ落ちるとか言っておいて、これが……）

ジムは自分で自分が嫌になっていた。

スペンサーを殺した後、自分も死ぬつもりだったと言っのに……。

「この程度なんだよなあ……」

煙を吸い込まないよう、小さく呟く。

立ちこめてきた煙を吸い込み、咳をして、ジムは、逃げなきゃなと立ち上がり、通路をふらふらと歩き出してしまっていた。

ゴウンとうねるような震動が発せられ、ジムの背中を炎がなぶった。

「かつ……」

熱風にあおられて、その場に倒れる。

咄嗟に突こうとした左腕に激痛が走った。

肘に力が入らず曲がってしまう。顎をしたたかに打ちつけること

になっちゃった。

「……美幸、呼んでるのか？」

痛む顎を床に付けて、視線だけを上向ける。

汗が吹き出す。コートは熱に煽られて焦げ付いていた。

ちりちりと言う音が聞こえるようだった。肌が黒ずみ、頬が焼け、髪が縮れていく嫌な匂いが鼻についた。

「どうかしてる」

頭を振って意識をはっきりとさせる。

「こんな時に思い出すのが、あいつらか？」

真美と美幸。

信頼を感じていたのかもしれない。『美幸』と同じように、無邪気に接してくれていたから。

ジムが、真美を送る途中で赤くなって照れたのは、真美の寝顔に『美幸』を重ねてしまったことを、思い出したからであつた。

そんな自分を、恥じたのだ。

だがジムは、理想を現実の少女に照らし合わせられる様な素直さを失っていた。

だから振り払おうと懸命になっていた。

「美幸……、お前もこうだったのか？」

うつぶせに倒れたままで、ジムはばやけた視界に天使を見ていた。死にたくないよ……」

煙の向こうに美幸が見えた、無邪気に彼女は微笑んでいた。

それに力無く笑みを返し、ジムは意識を閉じようとした。

これでいい、と。

自分が不孝の元凶であつたのだからと。

ここで燃え尽きてしまおうと。

しかし……。

「ホームレス！」

その幻は、幻では無かつた。

「ため！ 市民でもないくせに世話焼かせんなー！」

肩に回される腕、引きずり上げられ、全身の傷が悲鳴を上げる。苦痛、腕に走った激痛が、生々しい現実感を取り戻させた。

「ムツキ？」

「保険も利かねえくせに、怪我してんじゃねえ！」

強引に体を引きずられながら、ジムは込み上げて来るおかしさに笑いをこぼした。

「なんだよ？」

（氣い触れたのか？）

ギョツとするムツキを余所にジムは笑った。

（こいつが天使に……、美幸に見えるなんてな、どうかしてる……）
「笑ってる暇があったら道を教える！」

ムツキは大声で怒鳴り散らした。

「手間かけさせんな！ さつさと立ちやがれ！」

ジムとは違い、彼には生きる意志がある。

「手を借りたきや市民権取ってからにしろお！」

言いながらも見捨てたりはしない。

「こんなところで死なれたらなっ、目覚めが悪いんだよ、この野郎！」
それが職業意識から来るものかどうかは、かなり微妙な感じであった。

「ジム！」

美幸は、パンツとドアを弾き飛ばす勢いで駆け込んだ。

ベッドの上で、ふてくされたような顔をしているジムを見付けて、その場にペタンと座り込む。

「お、おい……」

慌てたのは、案内をしてきたムツキであつた。

「ふ、ええ……」

「なにも泣く事ないでしょう？」

はい、とハンカチを渡し、腰砕けになつた美幸を真美は立たせる。

「結構いい病室に入れてもらつてるじゃない」

「ああ……」

ジムは顔を背けるようにして、窓の外に目をやった。

その態度に、真美は何かを感じて歩み寄る。

「どうしたの？」

ベッドの上に手を突いて、彼の顔を覗きこむ。

「居心地が悪いんだとさ」

ムツキは肩をすくめた。

「信じらんねえよ、こんな傷じゃ、死にやしないって、抜け出そうとするんだぜ？」

「そんなに悪いの？」

顔をしかめる。

「海にな……、飛び込むにしても出血が酷くて、信じられるか？
焼けたパイプでジュツ！　だ」

想像したのか美幸は卒倒寸前の体である。

口元を押さえて嘔吐えずいてしまったのは、車の中で、傷口を焼いたときの臭いを思い出してしまったからだつた。

真美も、ジムのギブスで固定された腕に触れないよう、少し離れ

た。

「……とにかく、左腕がズタズタだ。一番安い治療が切断だって聞いて、こいつ、じゃあそれでって態度なんだぜ？」

ムツキは脇に抱えていた大判の封筒を放り出した。

「恩に着るよ？」

ばさりとジムの上に落ちる。

真美はちらりと美幸を思いやった。

案の定、美幸は血の気を失った顔をして言葉も吐けなくなっている。

「ま、それでも読んで、養生しろよ？」

手を付けようとしないうジムに変わって、真美がその書類の封を開けた。

「これ……ジムの戸籍謄本？」

「嘘!？」

ばつと美幸が顔を上げる。

慌ててくいいるように真美は見つめた、美幸も涙を拭いながらそれを覗きこんだ。

にやにやとムツキが説明をする。

「準市民権。今度新しく発令される制度だ。お前はその第一号なんだとさ」

「……三宅ジロウ？」

訝しい声が漏らされた。

「ジムの本名だと」

ムツキは肩をすくめた。

「準市民権制度は本国の亡命者に対して施行された制度だけどな、それがこの度、ってわけだ」

「今になつて？」

怪訝そうにする真美に説明する。

「今度の事で、ホームレスに対する認識が変わったって事さ。ジャンパンは不穏分子を育てる温床になっているから、ちゃんとしなきゃ

つてな」

「それで？」

「だから、ホームレスって存在をちゃんと社会的に認知して、保護しようって流れになったんだよ」

この説明に納得しなかったのは美幸であった。

「じゃあジムのやって来たことって、どうなるの！？」

美幸は喚いた。

「あんなに……、辛い思いをして」

「無駄じゃあないさ」

ムツキはタバコを取り出しかけて止めた。

ここは病院であったと思い出したからだ。

「タンカージャック。あの事件があったから、本国がようやく腰を上げたんだ。放置しておける問題じゃないって認識してな」

「だけど……」

「それに、実質的には、テロを止めたのはジムだからな。だから、第一号に抜擢されたんだよ」

まだ、あるいはなにか納得できない。

そんな二人に、ムツキは帰ろうと促した。

「今日はゆつくりさせてやろうや」

ムツキは二人の背を押した。

そして肩越しにジムへと言う。

「念願が叶ったんだ、じっくり味わえよ？」

だがしかし、ジムは書類を手に取ろうとせず、相変わらず窓の外を眺めていた。

『ジム！』

どこの草原だろうか？

駆け寄って来る少女に、ジムは目尻を垂れ下げていた。

「美幸……」

腰を落として、駆け寄って来た女の子を抱きとめる。

彼の首に腕を回して、ひとしきり頬をすりあわせた後、少女は「むふー」っと笑って口にした。

『行こう?』

小さな手に袖を引かれる。

美幸の笑顔にはっとして、ジムは夢から目を覚ました。

月明かりが窓の外から差し込んでいる。

「美幸……」

呼ばれたままに、ジムはベッドを抜け出した。

夜の街、それも放置地区ともなると、そこは静寂に満たされている。

街灯も無く、辺りは闇に包まれている。月と星の明かりが唯一の頼みの綱となっているのだが、人の目は、その程度の闇も見通せず、襲う者、襲われる者、両者を等しく潜ませていた。

「ここに居たのか……」

倒壊したビル。

その壁の前、瓦礫の上にしゃがみ込んでいたジムは、サムの声に顔を上げた。

表情がない。

サムは、魂が抜け落ちてしまっていると感じ取った。

「病院の方……、大騒ぎになってたぞ」

「ああ……」

ギブスのために、コートは羽織るように背にかけている。

「二人も心配している」

「ああ」

気のない返事であった。

ジムはまだ、ぼうつとした目を、正面の暗がりへ投げやっていた。
「どうしてかな……」

サムのタバコが吸いつくされるほどの長い時間を経た後に、ジムは不意に切り出した。

「落ちつくんだ」

ジムは自嘲気味の笑みを浮かべた。

顔を上げる。正面、道路の向こう、荒れ果てた街の角に男の影が見えた。

その体は、半分がとろけるように焼け崩れいた。

目玉が垂れ下がるように落ちているのに、にたりと一つ笑って、それは身をひるがえし、闇の中へと消えていった。

「スペンサー……」

ジムは一人ごちると、視線を次の路地へと向けた。

首から血を滴らせた男が、這いずるように横切っていった。

「ケンヂ……」

一度目を閉じ、気持ちを落ち着かせ、覚悟を決めてから正面を見る。

（美幸……）

その名前だけは口に出せなかった。

驚くほどの間近くで、くすくすと彼女は笑った。

見つけたときと同じ、哀れな姿をしていた。

尻を落とし、立ち上がれなくなっているジムの顔を、覗きこむようにして……、少女は身を寄せて、彼の耳へと、小さな唇で、何かを囁いた。

その囁きは、意味だけがジムの中へと染み込んでいく。

「ジム？」

「なんでもない……」

ジムはサムの問いかけに苦笑で返した。

「なんでもない、さ……」

彼は、手元に置いていた封筒を手にした。

準市民権。その書類を封筒から取り出し、そして……。

BULLET：21（後書き）

書いてた当時は、なんかB級サスペンス映画っぽいノリで書こうとしていた記憶があります。

中途半端な人間ドラマを垂れ流しつつ、次々と事件が連続し、最後は「え？ それどうしたの？ どうなったの？」ってところで幕がひかれて、エンドロールに入っちゃうような。

一応三部作のつもりで二部目を書いていて、そこで挫折した作品です。

いつの日か書いてやりたい気はしてますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9081x/>

HOLSTER 空薬莢

2011年11月14日03時33分発行